

令和6年度 鹿児島県小・中学校長

# 研究大会記録



令和6年11月15日（金）

鹿児島県連合校長協会

## < 目 次 >

### 【 小学校の部 】

- 第1分科会「学校経営」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 1
- 第2分科会「教育課程」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 3
- 第3分科会「現職教育」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 5
- 第4分科会「学力向上」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 7
- 第5分科会「心の教育」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 9
- 第6分科会「健康・安全教育」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 11
- 第7分科会「人権教育・特別支援教育」・・・・・・・・・・・・ p. 13
- 第8分科会「国際理解教育・情報教育」・・・・・・・・・・・・ p. 15

### 【 中学校の部 】

- 第1分科会「教育課程・評価の工夫」・・・・・・・・・・・・ p. 18
- 第2分科会「教職員の資質向上」・・・・・・・・・・・・ p. 21
- 第3分科会「道徳教育・人権教育」・・・・・・・・・・・・ p. 24
- 第4分科会「キャリア教育・生徒指導」・・・・・・・・・・・・ p. 26
- 第5分科会「開かれた学校づくり」・・・・・・・・・・・・ p. 28

# 小学校分科会研究主題

分科会	研究主題	趣 旨	協議題	頁
第一分科会	学校経営 「生きる力」を育む活力あふれる学校づくりの理念を学校経営の指針とする	子どもたちに確かな学力や豊かな人間性、健康や体力などの「生きる力」を育んでいくためには、それぞれの学校の歴史や伝統、地域性などを尊重しながらも、進取の気風や積極性にあふれた活力ある学校づくりを目指すことが重要である。そのためには、学校の現状分析から課題を把握し、ビジョンを明確にした学校運営が求められる。同時に、「学校評価ガイドライン」の趣旨を生かした学校評価を実施し、説明・結果責任を果たすとともに常に学校経営の改善を図っていくことが緊要である。 ここでは、活力あふれる学校づくりを目指すための学校経営ビジョンの実現や、学校評価の在り方・生かし方等について究明する。	(1) 学校経営ビジョンの実現を目指した学校運営の推進	14
			(2) 学校評価の在り方と評価を生かした学校経営の改善	18
第二分科会	地域「育」のよさを生かした「育」を育む教育課程	一人一人の子どもの「生きる力」を育む教育課程の編成・実施に当たっては、子どもの実態及び心身の発達段階や特性を十分考慮するとともに、地域の自然や文化、伝統等に触れるなど、学校や地域のよさを生かした特色ある教育活動の展開を図る教育課程を編成・実施・評価することが重要である。 ここでは、地域のよさを生かした特色ある教育課程と複式・小規模校の特性を生かした教育課程の両面から「生きる力」を育む教育課程の在り方を究明する。	(1) 地域のよさを生かした特色ある教育課程の編成・実施と評価	22
			(2) 複式・小規模校の特性を生かした教育課程の編成・実施と評価	26
第三分科会	現職教育 時代に求めらるべき指導力	知識基盤社会やグローバル化が進出し、高度な危機管理・対応が必要となっていく現状において、教職員にはこれらに対応した様々な資質や能力とともに教育者としての強い職責感が求められている。この経営課題の解決を図る現職教育を推進する上で、研修体制の充実や人事評価制度の活用は緊要な課題である。 ここでは、教育を担う使命感と専門職としての指導力を高めるとともに、教職員自らが主体的に自己の成長を図っていくための現職教育の具体的な方策を究明する。	(1) 使命感と専門職としての指導力を高める現職教育の研修体制の推進	30
			(2) 主体的自己成長を図る教職員を育成する人事評価制度の推進	34
第四分科会	学力向上 これからの社会を生きるための確かな学力の育成	変化の激しい社会を豊かに生きるために、子どもが自ら考え、判断し、解決するという基本的な考え方に立って「読み、書き、算」をはじめとする、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着と思考力・判断力・表現力等の育成を図ることは学校教育の中心となる課題である。 ここでは、子どもの学力の実態を的確にとらえ、これまでの取組を見直して指導法の工夫・改善、学習意欲の向上や学習習慣の確立を通して確かな学力の育成を図るとともに、教科等横断的な学習を行う総合的な学習の時間の展開策について究明する。	(1) 確かな学力の育成を図る具体的方策の推進	38
			(2) 教科等横断的な学習を行う総合的な学習の時間の推進	42
第五分科会	心の教育 望ましい人間関係を育てる心の教育	いじめ・不登校、非行などの状況は複雑多様化しており、思いやりの心の欠如、社会性や規範意識の低下など憂慮すべき教育上の問題が生じている。そのため、全教育活動を通して、子ども一人一人に自己存在感・自己有用感をもたせるとともに、望ましい社会性や規範意識を身に付けさせ、思いやりや正義感等豊かな心を育てていくことが重要である。 ここでは、個々の自律を促し、お互いを尊重し、共に認め合う望ましい人間関係を育てる生徒指導の在り方や体験活動を通じた豊かな心の育成、家庭や地域社会との連携を密にした道徳教育の更なる充実のための方策を究明する。	(1) 社会性や規範意識を育成する生徒指導の推進	46
			(2) 豊かな体験活動及び家庭や地域社会との連携を重視した道徳教育の推進	50
第六分科会	健康・安全教育 健康な心と体を育む	社会環境や生活環境の急激な変化によって、学校保健、食育・学校給食、学校安全には様々な課題が生じている。学校における安全・安心な環境が確保される、子どもたちが心身ともに健康やかに成長していくためには、健康・安全教育の確かな指導体制を築くことが極めて重要であり、社会の変化に対応した新しい取組が求められている。 ここでは、家庭や地域との連携を深めながら、子ども一人一人が主体的に体力・健康づくりに取り組み、生涯を通じて健康・安全で活力のある生活を送るための基礎を培う健康・安全教育の在り方を究明する。	(1) 自ら進んで心身を鍛え、たくましい心と体を育てる健康教育の推進	54
			(2) 自ら危険を予知し、安全に行動する能力や態度を育てる安全教育の推進	58
第七分科会	人権教育 人間尊重の精神に基づき、子どもが育ち、共に生きていくための人権教育及び特別支援教育	人間尊重の精神に基づく心豊かな社会を実現するために、基本的な人権を尊重し、公平・公正な態度で共に生きる力を育てる人権教育の充実が、学校教育が解決すべき重要な課題である。 ここでは、偏見や差別をなくしていく意欲と実践力を育てる人権教育の在り方を究明する。  特別な支援が必要な子どもの立場に立って、教育的ニーズを把握し、必要な支援を行い、一人一人の能力を最大限に伸ばすとともに、自立や社会参加のための基礎を培うことが求められている。 ここでは、特別な支援を必要とする子ども一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育の在り方を究明する。	(1) 自他を大切にすると心や実践力を育てる人権教育の推進	62
			(2) 子どもの教育的ニーズに応え、一人一人が生き生きと輝く特別支援教育の推進	66
第八分科会	国際理解教育 環境教育 キャリア教育	グローバル社会の進展に対応し、自己実現を図る人間を育成するためには、子どもたちに自他の文化を理解したり、地球規模での環境問題を考えさせていくことが必要である。そうする中で、共に生きていく態度や必要な国際感覚を身に付けさせることが重要である。 ここでは、異文化に触れたり、喫緊の環境問題を考えていく中で、すべての人々とともによく生きる態度を育成する国際理解教育や環境教育の在り方を究明する。  情報技術の急激な進展に対応し、子どもたちが情報を主体的に活用しながら他者と協働し、新たな価値を創造するなど情報活用能力を育成することが重要である。また、少子高齢化の進行とともに人間関係の希薄化が指摘される中、周囲の人々と協力することの大切さやよりよい社会を協働して形成しようとする態度を育む必要がある。 ここでは、カリキュラム・マネジメントにより子どもたちの情報活用能力をはじめ、プログラミング的思考、情報モラル等コミュニケーション能力等、生きる力の基礎を積極的に身に付けさせる情報教育やキャリア教育の在り方を究明する。	(1) 人間・自然理解を基調とし、異文化に触れたり、環境問題などに対する興味・関心を高め、必要な資質・能力を高めたりする国際理解教育や環境教育の推進	70
			(2) 情報活用能力をはじめ、プログラミング的思考・情報モラル等を育む情報教育の推進 自立や協働の心を育むキャリア教育の推進	74

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 12:30~13:50

○ 分科会 I 小学校 第1分科会

「学校経営」

○ 研究主題

『生きる力』を育む活力ある学校づくりを目指す校  
長の経営理念と方策」

○ 協議題

「各学校で取り組んでいる教育実践を持続可能なものにしていくためには、校長として人・環境資源等をどのように生かしていけばよいのか、そのためにどのようなことが大切か。」

○ 発表者 いちき串木野市立川上小学校 牧 健一

○ 司会者 いちき串木野立串木野小学校 牧之瀬 陽一

○ 記録者 いちき串木野市立生福小学校 徳永 寛隆

【質疑応答】

(質問：隈之城小 久木田 剛)

- ・ 特認生は、どこから、どうやって通学しているのか。また、特認生の保護者は学校に何を期待しているのか。

(応答：川上小 牧 健一)

- ・ 特認生は、串木野小学校区や市来小学校区から全員、市の特認生用のバスを利用して通学している。
- ・ 特認生の保護者からは、「川上小の児童はとても優秀だからどんな教育をしているのか興味があった。」、児童からは、「川上小ならではのことをやってみたい。」などの声を聞いている。

(質問：平佐東小 今屋 厚造)

- ・ 特認校について、何か広報活動の工夫をしているか。

(応答：川上小 牧 健一)

- ・ 令和5年度から市の特認校制度が変更され、市来小学校区しか許可されないことになったため、現在は、特に広報活動はしていない。
- ・ 子どもを川上小に通わせている高校の同級生がいるなど、保護者の口コミで学校のよさが広がっているようである。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(E班：福平小 藤崎 隆博)

- ・ 特認校を持続させていくための取組や課題について話を進めた。
- ・ 極小規模校においては、人材が不足することをどのようにカバーしていくか、手段としてどうやっていけば効率的かなどが課題となっている。
- ・ 紙媒体で配布していたものをインスタに載せて分かりやすく保護者に伝えるなど工夫している学校があった。
- ・ 複式学級のある学校間で遠隔授業などを取り入れ、人的資源を確保して、持続可能な形で進めていくしかないという意見があった。
- ・ PTA 組織では、会長を中心に動きやすいように役員が決まることが多いが、会長が替わると後継が育たないという課題が見られる。保護者がやりたい専門部を選んで所属する方式をとることで後任が育ってきているという学校があった。

(G班：楳小 奥 貴浩)

- ・ 各学校の活動について情報交換を行ったが、職員同士の同僚性を高めていくことが課題として挙げられた。
- ・ 同僚性を高めていくために、校内研修ではベテランと若手がチームを組んで研究授業を行っている学校があり、職員の関係性づくりが大切だという意見があった。
- ・ 子ども同士で教え合ったり環境づくりを工夫したりしている点が参考になった。
- ・ 職員及び子どもについて、人とのつながりを大切にした活動をしていくことが持続可能な取組のベースにつながっていくのではないということが話題になった。
- ・ 実践発表で紹介された取組のように、いろいろな活動を最適化し、見直していることなど見習っていききたいという意見があった。

(記録 生福小 徳永 寛隆)

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

- 日 時 令和6年11月15日(金) 14:15~15:55
- 分科会Ⅱ 小学校 第1分科会  
「学校経営」
- 研究主題  
『生きる力』を育む活力ある学校づくりを目指す校長の経営理念と方策」
- 協議題  
「学校評価の在り方と評価を生かした学校経営の改善」
- 発表者 薩摩川内市立平佐西小学校 新田 賢一
- 司会者 薩摩川内市立峰山小学校 青崎 幸一
- 記録者 薩摩川内市立永利小学校 牧本 佳代子

【質疑応答】

(質問：吉松小 坂本 敬)

- ・ 企画委員会の廃止でのメリット、デメリットは。
- ・ 特別支援学級担任の交流学級への参画の仕方は。  
(応答：平佐西小 新田 賢一)
- ・ メリットとして放課後の時間確保ができた。起案された提案を教務主任、学年主任が見ることで学年会で話題にしている。ミドルリーダー育成にもつながっている。今のところトラブルはない。
- ・ 通常学級の支援や給食指導の手伝いをしている。また、今後、業務の分担等を行い、全体で取り組む体制を整える。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(A班：南方小 今村 靖)

- ・ 校長、教頭、教務だけでなく分担して見てもらうことで目的意識をもち、結果が共有できる。
- ・ 衛生委員会での意見は、何を目的としているかはっきりさせる。
- ・ 先生方自身に主体的に考えさせる。年何回行うか、還元をいつするかも大事となる。

(J班：吉松小 坂本 敬)

- ・ アンケート項目の数や内容を見直し、無回答をなくす。目的をはっきりとする。
- ・ グランドデザインとの整合性を図る。
- ・ デジタルツールの活用を図る。
- ・ 子供の姿から評価してもらう。(運営協議会等)

【指導助言】

県教育庁義務教育課企画調査係主任指導主事兼係長  
前 保廣

〈2校の実践発表について〉

- いちき串木野市立川上小学校
  - ・ グランドデザインの改訂としてそれぞれの立場で達成できるように指標が示されている。
  - ・ ウェルビーイングの向上を目指した内容となっている。
  - ・ 学校、家庭、地域が一体となった活動となっており、持続可能な活動への工夫が見られる。
- 薩摩川内市立平佐西小学校
  - ・ 小中共通の評価項目であることから連携が図りやすい。また、人事評価記録書に反映させ、中間評価を行っている点はよい。
  - ・ 保護や地域に丁寧な回答を行い、改善点も示している。
  - ・ 校内研修や不登校への対策に改善が見られ、目的が達成されている。
- 2校から
  - ・ 校長のビジョンが共有され、子供たちの「生きる力」を育む点から参考となることが多い。

〈指導〉

- ・ ウェルビーイングとは身体的・精神的・社会的幸福のことであり、到達モデルを示す。
- ・ 第4期教育振興基本計画に示されている環境モデルを参考に各学校が実態に応じて取り組む。
- ・ 子供たちには、認知的スキルと非認知的スキルアップをねらう。学びに没頭し、情熱を注げるよう、成長を支える。
- ・ 子供たちの幸せは、人々との交流で得られるものが多い。地域を巻き込んで、校長のリーダーシップのもと意図的に進めていく。

(記録 永利小 牧本 佳代子)

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日時 令和6年11月15日(金) 12:35~14:00

○ 分科会 I 小学校 第2分科会

「教育課程」

○ 研究主題

「地域のよさを生かし、『生きる力』を育む特色ある教育課程」

○ 協議第

「地域のよさを生かした特色ある教育課程の編成・実施と評価」

○ 発表者 鹿児島市立本城小学校 牧住 幸二

○ 司会者 鹿児島市立宮小学校 郷原 光徳

○ 記録者 鹿児島市立牟礼岡小学校 吉松 公一

【質疑応答】

(質問：納官小 奈良 博一)

- ・ 同じ中学校区の校長が集まって研修会を行っているとのことだったが、クローズアップしている課題はあるか。

(応答：本城小 牧住 幸二)

- ・ 不登校対策が一番の大きな話題である。個別の問題に対して情報共有を行い、対応について協議を行っている。

(応答：宮小 郷原 光徳)

- ・ 講師の先生を招いて講話をいただいた。

講師1：元生徒指導監

内容：不登校、いじめの対応について

講師2：桜峰小校長

内容：予習型学習について

(質問：納官小 奈良 博一)

- ・ 地域一体となることはよいが、職員の負担が増えたと訴えることはないか。

(応答：本城小 牧住 幸二)

- ・ 例えば、土曜授業日に学習発表会を行い、その後から地域行事の敬老会を行うなどして業務改善を意識した計画をたてている。

(質問：青葉小 瀬戸山 文隆)

- ・ 児童数が非常に少ない中で、「話し合い活動」や「協働での課題解決」等を行う場合に、近隣の学校とリモート学習を行う等の取組はないか。

(応答：本城小 牧住 幸二)

- ・ 吉田南中校区内の学校ではそのような取組は無いが、今後検討したいと考えている。

(質問：青葉小 瀬戸山 文隆)

- ・ 教育活動にはマンパワーが必要であるが、限られた人数の中で、職員の人材活用はあるか。

(応答：本城小 牧住 幸二)

- ・ 職員一人一人に音楽や美術、科学等の得意分野があり、それを生かした活動を行っている。また、地域や保護者の人材活用無くしては本校の教育は成り立たない状況である。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(B班：西紫原小, 伊集院北小, 国分北小, 鹿屋小)

- ・ 本グループは全て中規模校なので、発表校とは地域のありようが違うが地域の特色を踏まえた教育活動を展開している。地域によっては伝統的な行事がない学校もあるが、地域に詳しい人材を確保している。

課題としては、職員の意識が低く、地域のよさを知らないことである。地域の方々の協力を求める中で職員の理解を深めていきたい。コミュニティスクールとして学校長がリーダーシップを発揮し、ビジョンを示していく必要がある。

(F班：西谷山小, 折田小, 中平小, 小宿小)

- ・ 学校規模は様々であるが、米作りやそば作り、八月祭りなど共通する行事もあった。

業務改善の名のもとに必要なものまでもカットされている現状があるのではないか。本来必要なものが失われ、質の低下が懸念される。コロナ禍が終息した今こそ、地域のつながりを生かした活動を復活させていきたい。

(G班：旭小, 三体小, 納官小, 屋仁小)

- ・ 職員自体に体験が少ない、知らない。体験活動それぞれの狙いや意義を十分に理解させ地域のよさを子供たちに伝えていきたい。

鹿児島県小中学校校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 14:15~15:55

○ 分科会Ⅱ 小学校 第2分科会

「教育課程」

○ 研究主題

地域のよさを生かし、「生きる力」を育む特色ある教育課程

○ 協議題

「複式・小規模校の特性を生かした教育課程の編成・実施と評価」

○ 発表者 志布志市立田之浦小学校 川邊 真人

○ 司会者 志布志市立香月小学校 村岡 和志

○ 記録者 志布志市立志布志小学校 池之上敬一

【質疑応答】

(質問：国分北小 川野 浩明)

・ 社会に開かれた教育課程という視点で、教育課程の編成段階で地域の方々が関わることはないのか。

(応答：田之浦小 川邊 真人)

・ 総合的な学習の時間や創意の年間指導計画を作成する段階で、協力が得られるのか、学習活動をより効果的に実施する方法はないのか等について、地域の方々と協議する(確認)場をもっている。

(質問：納官小 奈良 博一、諸鈍小 赤池 夏樹)

・ 遠隔授業の実施学年、教科、実施進度及び次年度の計画をどのように作成しているのか。

・ 遠隔授業を行う場合、評価をどうしているのか。

(応答：田之浦小 川邊 真人)

・ 低学年の算数科で、年1単元の実施である。教科や実施時期は決めておらず、担任同士が打ち合わせをして実施するようにしている。評価については、授業者が子供の表情やポストテスト等の結果を見て、担任と共有している。

(質問：里小 永野 俊也)

・ チーム担任制を導入するに当たり、どのように校長としてリーダーシップを発揮したのか。

(応答：伊崎田小 大山 昭二)

・ 職員に、「一人でしない 一人にしない」とチーム担任制の目的を伝えた。ベテランの負担が増えるのではないかとの声もあったが、キーマンとなる先生に相談しながら理解を求め、導入を推進した。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(I班：大棚小 平野 武志)

・ 指導体制の工夫では、教科担任制を実施し、担当時数の均一化を図っている学校があり、次年度チーム担任制の導入も検討しているので、参考となる発表であった。近隣校との連携では、合同行事を実施する場合は当番制にしていることや年間の半分程度を遠隔授業で実施している学校の実践紹介もあった。

(M班：轟 小 植田 秀樹)

・ 実践発表のように、小規模校では複式解消のため特別支援学級担任や教頭が授業に入っている学校があった。ただし、教頭の業務改善のためには事務仕事等で校長のフォローも必要だとの意見も出された。南種子では、外国語や音楽の授業で、中学校(1校)の先生が近隣の小学校の授業を受けもち、中1ギャップの解消につながっている事例の紹介もあった。

【指導助言】

県教育庁義務教育課企画調査係指導主事

新名主 洋一

【2校の実践より】

・ 1校目の発表では、校長のつながりを大切にしているのが印象的であった。地域を一緒に創り出すという観点での小中連携は新たな発見であった。本城WITHの考え方は、社会に開かれた教育課程、豊かな教育活動の実現、業務改善にもつながっていくと感じた。

・ 2校目の発表で、遠隔合同授業を子供の実態に合わせ、柔軟に実施しているのがよかった。遠隔授業では、両方に授業者がいることが必要であることは確認しておきたい。

・ 地域とのつながりを意識して教育課程編成を行う場合には、よさや課題を共有しながら地域と一緒に取り組んでいけるよう働きかけていくことが大切である。また、関係者同士で目標や情報を共有しながら、具体的な数値を示し校長の思いを伝えていくことも大事である。

・ 地域行事等を教育課程に取り入れる際には、どのような資質・能力を育てるのかを明確にして計画を作成する必要がある。

(記録 志布志小 池之上 敬一)

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 12:30~13:50

○ 分科会 I 小学校 第3分科会

「現職教育」

○ 研究主題

「時代の要請に応え、使命感と指導力を高める現職教育」

○ 協議題

「使命感と専門職としての指導力を高める現職教育の研修体制の推進」

○ 発表者 伊佐市立大口小学校 垣内 秀一郎

○ 司会者 伊佐市立大口東小学校 森 謙次

○ 記録者 伊佐市立山野小学校 池本 勝志

【質疑応答】

(質問：南種子町立大川小学校 山口 幸三)

- ・学年部研修の90分はどのようにして生み出したのか。
- ・学年部研修と全体研修のつながりはどうなっているのか。全体もあり、学年もあるのか。

(応答：伊佐市立大口小学校 垣内 秀一郎)

- ・業間の活動等を調整して75分は確保するようにしている。90分確保するときは、5時間授業にしている。
- ・全体研修の中で1人の授業について検討することはしていない。全体では、研修の方向性や視点、仮説等の確認を行い、ブレがないようにしている。2学年部研修を今年度から行うこともあり、多くの意見が取り入れられるようにしている。

(質問：鹿児島市立西田小学校 山鹿 真人)

- ・時間的な枠組みについて、学年部研修や異学年研修を年間でどれくらい行うなど、年間のスケジュール設定などについて、どれくらい校長の指導性が発揮されているのか。
- ・職員の動機付けをどう図っているのか。ロイロノートへの抵抗感があると思われる。ベテランと若手のギャップがあるのではないかと。若手がベテランに教えることなどで主体性が発揮されたりしているのか。そのことに、校長として何かしているのか。

(質問：南九州市立清水小学校 有水 勝一郎)

- ・授業研究の時間を削減し、有効に活用していくた

めにも、授業の在り方について、校長なりのフォーマットを示すなど研修係にしていることは何かあるのか。

(応答：伊佐市立大口小学校 垣内 秀一郎)

- ・いい授業をしていても先生方に見る時間がない現状があった。研修係に校長が撮ったロイロノートの映像を見せた。ロイロノートの使い方について、若手にベテランが尋ねるといようないい流れができ、バランスがとれている。
- ・学びの羅針盤が研修や授業づくりの基盤となることを全体で確認し、研修のたびに意識付けとして使用している。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(A班：鹿児島市立本名小学校 野口 貴弘)

- ・どの学校も職員構成に課題がある。ベテラン、若手のそれぞれのよさを生かすようにしていかなければならない。
- ・それまで頼られていたベテランが異動によって出ることになると、次が育つこともある。
- ・研修に校内だけで対応するにはどうしても限界がある。研究指定を受けたり、受けた校外研修を他の職員に還元したりしていくことなどが必要だ。
- ・複式学級の学びを生かして学習者主体の授業を実践していくことが、業務改善につながるのではないかと。
- ・組織で動くために、校長が我慢して、任せるべきところは任せる必要がある。
- ・掃除の回数を減らしたり、業間の活動や休み時間の削減などを行い、午後の時間を生み出す必要がある。

(B班：南九州市立清水小学校 有水 勝一郎)

- ・小規模校どうして連携し、研修を深めている。
- ・近隣校のパワーアップ研修に入れてもらったりしている。
- ・大勢でのディスカッションができるようにしている。
- ・フォーマットとしての学びの羅針盤を示し、確認を行っていく。

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日（金）12:35～14:00

○ 分科会Ⅱ 小学校 第3分科会

「現職教育」

○ 研究主題

「時代の要請に応え、使命感と指導力を高める現職教育」

○ 協議題

「主体的自己成長を図る教職員を育成する人事評価制度の推進」

○ 発表者 出水市立 米ノ津小学校 中島 伸一朗

○ 司会者 出水市立 上 場小学校 山本 裕三

○ 記録者 出水市立米ノ津東小学校 大原 暁子

【質疑応答】

（質問：江内小 豊島 秀世）

・発表では中間面談及び期末面談における助言や個々の関わりについて紹介していただいたが、当初面談では、どのような助言を行っているか。「かごしま県教員等育成指標」に示された「ステージ別資質向上指標」の内容と照らし合わせて見たとき、そのステージに合わないような事項を記載している職員にどのような工夫をしているか、参考にしたい。

（応答：米ノ津東小 中島 伸一朗）

・各ステージごとに示された育成指標の内容と照らし合わせながら、校長の思いや願いを伝え、付加してほしいことを面談で伝え、書き直しをお願いしている。

【グループ討議後の班ごとの発表】

（E班：栗野小 山田 吉夫）

・主体的に自己成長を促すという視点で、良い面を見付けて良い評価をつけるようにしている。

・新規採用職員の途中離脱もあり、教頭と十分に情報を共有して、どこまで語るか事前に打ち合わせ、慎重に話をするよう心掛けている。

・学校の教育課題を明確にし、数値目標で表せるところは、できるだけ数値で示すようにし、それに基づいて評価するようにしている。

・評価のための情報収集は、管理職だけではなかなか難しいので、「最近〇〇先生どう？」他の職員との語らいから情報を集めながら状態像を把握している。

・受講推奨については当初申告面談で、どういうこと

に興味があるのかを把握し、普段から、「積極的な無駄話」をするようにして、必要な研修を提案している。

（H班：大川内小 有川 武）

・授業を見ながら、板書を画像で撮ったり子供たちの反応をメモしたりして記録を蓄積することで、面談の際の材料にすることが大事である。

・面談ではPlant で個々の受講履歴をプリントして、受講を価値付けしている。Plant に様々な研修がアップされているので、この活用を図りたい。ただし、紹介するためには、校長自身がその研修の中身を知らないといけな。そのための時間確保が課題である。

【指導助言】

県教育庁教職員課小中学校人事管理係主幹兼係長

原田 浩毅

<2つの実践から>

・1校目の発表は、互いの授業の様子を動画で撮影し、それをロイロノートで共有すること、校時表の見直しで学年会研修の時間を確保することで、教師の主体的な学びを促す、授業改善を中心とした学校経営の取組を紹介していただいた。動画で撮ることが日常化し、互いにたくさんの授業を見ることで、子供の学びに着目した授業づくりができていく点が素晴らしい。

・2校目の発表では、人事評価制度の目的をしっかりと理解し、職員と十分に語り込むことで、評価が「B」から「A」になるよう、あるいは、新たな校務分掌を経験させてキャリアアップを図るようするなど、職員の自己成長を促す取組を紹介していただいた。特に、ベテランの1年担任に生徒指導主任を任せたとあるエピソードは、「職が人を育てる」好事例であった。

<メッセージ>

・採用数が増え、ほとんどの学校で、若手と50代が多い職員構成となっている。50代の職員がこれまでに培ってきた経験をしっかりと伝えていくことに加え、65歳定年を踏まえて、ベテラン職員が、最新の教育のトレンドにしっかりと対応することが求められている。

ビジョンと信念をもち、丁寧に職員との語らいの中で課題を共有し、戦略的な校内人事やICTを活用した研修の改革など、年度途中からでも果敢に進めてほしい。

（記録 米ノ津東小 大原 暁子）

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 12:40~14:00

○ 分科会 I 小学校 第4分科会

「学力向上」

○ 研究主題

「これからの社会を豊かに生きるための確かな学力の育成」

○ 協議題

「確かな学力の育成を図る具体的方策の推進」

○ 発表者 霧島市立小浜小学校 白田 実

○ 司会者 霧島市立溝辺小学校 林 賢介

○ 記録者 霧島市立小野小学校 高見 憲次

#### 【質疑応答】

(質問: 持留小 松崎 光雄)

- ・ 複式学級における単学年授業、交換事業について、実施している学年、教科の担当者の決まりがあるか。
- ・ 学力向上に向けて、管理職はどのように関わり、体制づくりをしているか。
- ・ 取組を進める中で困ったことはないか。

(応答: 小浜小 白田 実)

- ・ 1・2年が単式学級、特別支援学級が2クラスあることから、交換授業については1・2年を中心に音楽や体育で行い、複式解消については、低学年担当の職員が高学年の書写に入ったり、特別支援学級の職員が自分の学級の児童の交流のタイミングで入ったりしている。
- ・ 過去には教頭が授業に入ることもあったが、現在は業務や研修の柔軟性を確保するために基本的には入らない体制で行っている。
- ・ 学力向上には職員の心理的・物理的な余裕が必要であり、業務改善が進まない中で楽しく学力を向上させていくということは難しい。児童の伸びている姿を職員に積極的に伝えながら、「楽しいよね。」と言葉に出すことで心にゆとりがもてるよう努めている。また、教頭の業務改善が非常に大事だと考えることから、教頭がゆとりをもち職員へのフォローができるようにしている。

(質問: 国分南小 上唐湊 司)

- ・ 職員が児童の発見や思考、学び合いの瞬間に気づき、それを積み重ねることで児童の主体的な学びの

姿勢を育てている。職員と児童の双方にとって重要な学びのプロセスとなっているが、どのような変容があり、深い学びにつながったのか。

(応答: 小浜小 白田 実)

- ・ 「楽しい」をキーワードとして経営方針を統一している。授業や行事を通して「楽しかったね。」という具体的な言葉を共有し、児童や職員の共感を促している。その結果、児童が主体的に学びに関わり、分からないことを質問したり、意見を積極的に伝えたりする雰囲気が生まれている。
- ・ 「楽しい学び」は、単に娯楽ではなく、学びそのものへの興味・関心を高めるものであり、授業の理解度や成績向上につながっている。

#### 【グループ討議後の班ごとの発表】

(M班: 富隈小 尾ノ上 義直)

- ・ ICT 活用の推進として世代間の意識差が課題だったが、使いやすさを徐々に実感してもらいながら職員の意識改革を進めた。使えなかった職員が使えるようになり、学校全体でICTを活用する環境が広がっている。
- ・ 職員と児童の「笑顔」を学校経営の基軸に据え、笑顔を中心とした活動や評価を重視している。グラウンドデザインや目標が多岐にわたる中で、「笑顔で一日を過ごす」ことを呼びかけ、具体的なエピソードを交えて意識を共有した。これらの取組が学力向上や児童の自己肯定感の向上に寄与している。

(E班: 高尾野小 永山 達治)

- ・ 授業改善や職員の学びを進めるには、校内外の研修によって資質を高め、教育の考え方を変える必要がある。
- ・ 狭い学力観にとらわれず、大学や多方面の専門家を招いた研修を通じて、広い意味での学力観を共有することが重要である。
- ・ 学校には意欲的で熱量のある職員が存在することから、そうした職員を中心に取組を広げる手法が必要である。
- ・ 「学習者主体の授業づくり」という言葉だけが先行しないよう、具体的で本質的な授業改善を目指すべきである。

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 14:15~15:35

○ 分科会Ⅱ 小学校 第4分科会

「学力向上」

○ 研究主題

「これからの社会を豊かに生きるための確かな学力の育成」

○ 協議題

「教科等横断的な探求的学習の推進」

○ 発表者 南九州市立宮脇小学校 上床 研三

○ 司会者 南九州市立青戸小学校 濱元 弘

○ 記録者 南九州市立粟ヶ窪小学校 吉満 昭代

### 【質疑応答】

(質問: 持留小 松寄 光雄先生)

- ・ 教科横断的な探求的学習「どうする宮脇」の取組は地域貢献にもつながる取組でよいと思った。誰がどのように提案し、どのように進めてきたのか。

(応答: 宮脇小 上床 研三先生)

- ・ 宮脇小校区は、地域と学校が連携・協働して、地域全体で未来を担う子供たちの成長を支え、地域を創生する「地域学校協働活動」に南九州市のモデル校として取り組んでいる。学校・家庭・地域の連携が図られ、活気ある校区であり、地区公民館長との関係性も保たれている。そこで、他県の実践をもとに校長が6年担任に提案した。社会科や国語科の教科間のつながりを考え、担任が総合的な学習の時間「ひかりタイム」のカリキュラムを考えてくれた。

(質問: 小浜小 白田 実先生)

- ・ 子供たちのアクションで自治会が変わったことがあるか。

(応答: 宮脇小 上床 研三先生)

- ・ 学校に10万円の寄付をしていただいた。学校にとっては大変ありがたいことだった。

(質問: 陵南小 深川 光久先生)

- ・ 表現力の向上について、変容を聞きたい。

(応答: 宮脇小 上床 研三先生)

- ・ 表現力については、楽しい授業、自分の意見が言える、聞いてくれる等、心理的安定性を担保することを継続したい。道徳科でP4Cの取組もしている。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(C班)

- ・ 自由進度学習については、単元の一部だけからでもやってみる。書写で行った学校もある。
- ・ 探究学習で防災教育を行った。主体性のもとになる切実感があり、それに家庭を巻き込み、自分の命を守るにはどうしたらよいか考える取組になった。
- ・ キッザニア学校版のようにたくさんの業者を学校に呼び、こんな仕事があって自分たちの生活を守ってくれている等の気づきや5年生になったらあの学習ができるという喜びにつながる取組があった。

(A班)

- ・ 自由進度学習とは、学び進めるための手段の一つ。単元、教科の絞り込みをする必要がある。
- ・ 教師側は準備がすごく大変、評価もすごく大変。子供たちはどうなのか。きっと楽しみ、喜びにしていると思う。ゴールを見据えて、子供が選択できるように組み立てること。おもしろいと思う先生から実践していく。多くの準備が必要なので準備ができるような業務改善をしていくことが必要である。

### 【指導助言】

県教育庁義務教育課義務教育係指導主事

山崎 晃

〈2つの実践発表について〉

- ・ 1校目は、子供たちが「楽しい」と「授業が分かる」というところを突き詰め、指導案の作り方等を工夫し、具体的な子供の姿をイメージし取り組んだ結果、学力向上につながったという発表をされた。
- ・ 2校目は、学力のとらえを校内研修で位置づけるところから始め、教師のファシリテーター的役割や適切と思われる単元での自由進度学習、一本の矢ではない学力向上を目指した取組を発表された。

〈国の動向等〉

- ・ 自己決定権、意思表示ができる等の子供の育成
- ・ 国の振興基本計画に多く使われているワード 創造、発見、解決、参画、ウェルビーイング等
- ・ 学習者主体の授業 学びの羅針盤 12 ページ
- ・ 今後の教育課程、学習指導及び学習評価等のあり方に関する有識者検討会論点整理 (R6. 9. 18)
- ・ 学習者主体の授業の具体 伊敷中

(記録 粟ヶ窪小 吉満 昭代)

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

- 日 時 令和6年11月15日(金) 12:40~14:00
- 分科会 I 小学校 第5分科会  
「心の教育」
- 研究主題  
「望ましい人間関係や規範意識を育てる心の教育」
- 協議題  
「望ましい人間関係や規範意識を育てる心の教育  
～社会性や規範意識を育成する生徒指導の推進～」
- 発表者 鹿屋市立上小原小学校 赤井 清人
- 司会者 鹿屋市立高隈小学校 水本 賢一
- 記録者 鹿屋市立大黒小学校 向吉 晴美

【質疑応答】

(質問:住吉小 川添 正和)

- ・ 小中一貫教育の充実を図るために児童・生徒の姿をテーマに取り組んでいると思うが、中学3年生のゴール、小学6年生のゴールの姿をどのように設定しているのか教えほしい。また、管理職同士の話し合いの場はあったのか教えてほしい。

※ 以下、3件関連した質問が続く。

(質問:国分西小 中村 英次)

- ・ 小中一貫の視点から学校経営のレベルで中学校と共通的なもの、系統的なものをどこまですり合わせたのか教えてほしい。

(質問:大浦小 上原 一宏)

- ・ 以前勤務した小中一体型の実態から中学生が小学生の世話をすることで温かい雰囲気がつくられる反面、小学6年生としての役目を感じられなかった。ゴールをどこにもっているか教えてほしい。

(質問:桜丘西小 田中 省一)

- ・ 乗り入れ授業について、算数は通年で取り組んでいるが、働き方改革の視点から中学校の先生の負担や苦情はなかったのか。納得して協力してもらえる手立てがあったのか教えてほしい。

(応答:上小原小 赤井 清人)

- ・ グランドデザインは小中それぞれ作成しているが小中一貫のものも作成している。例えば合同運動会は、中3を中心とした生徒会が自主自立的に行っている。本校は隣接型のため児童会活動も小6が中心になって自立して自分たちで考えて行っている。小

学校のゴールとしてはできれば自分たちで解決できるようにしたいと考えている。このような小中のゴールの姿をグランドデザインに取り入れている。管理職同士の話し合いの場として月1回小中一貫推進委員会が行われるので始まる前に校長同士で打合せをしている。乗り入れ授業について、中学校に小中連携加配が配置されている。今年は中学校の職員定数が減り、一人当たりの持ち時数に余裕がなくなった。そのため乗り入れ授業の回数も減り、6年の算数のみである。児童生徒の関係性について、小学生は天の川交流で中学生の頼もしい姿に触れて頑張ろうという気持ちになる。甘えることはない。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(K班:馬根小 畑 隆宏)

- ・ 親の都合で子供を休ませるとき校長としてどう対応するか話題になった。ある大規模校ではほぼ毎日欠席する児童が10人程度いる。学年でチームとして対応し一人で抱え込ませないようにしている。校長は相談員へのつなぎ役となり、組織としてあっているという事例があった。

(D班:亀山小 吉永 秀和)

- ・ 保護者対応について話題になった。暴言、暴力、飛び出し等の改善例として特別支援的な対応、医療機関へつなぐこと、チームとしての関わり、コーディネーターを中心とした関わりがあげられた。対象者が複数名いたり、療育を受けていなかったりすると対応が難しい。発表の中で生徒指導4つの視点と自己決定の場について説明があったが具体的にどういう授業の姿が見られたのか教えてほしい。

(応答:上小原小 赤井 清人)

- ・ 校内研修のテーマが「対話を楽しむ授業」である。研究授業や普段の授業もワンペーパーでまとめるようにしている。その際に子供の姿をメモするようにしている。子供が授業でのってきたときを認められた場面と捉え主体的に授業で活動する子供の姿を認めて担任に伝えている。そのことで劇的によくなったかどうかはわからないが、繰り返し行っている。

(まとめ:司会 高隈小 水本 賢一)

- ・ 外部の関係機関と連携が必要なとき校長がつなぎ役になるとよい。

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

- 日時 令和6年11月15日（金）14:15～15:55
- 分科会Ⅱ 小学校 第5分科会  
「心の教育」
- 研究主題  
「望ましい人間関係や規範意識を育てる心の教育」
- 協議題  
「豊かな体験活動及び家庭や地域社会との連携を重視した道徳教育の推進」
- 発表者 西之表市立上西小学校 畑 真一郎
- 司会者 西之表市立現和小学校 横山 政文
- 記録者 西之表市立下西小学校 神田 圭

【質疑応答】

（質問：石谷小 有村 博文）

- ・ 児童の自己有用感の高まりを感じることができたエピソードがあれば教えてほしい。

（応答：上西小 畑 真一郎）

- ・ 特認校制度にある本校の実態として、様々な要因から自信をもてない児童がいる。そのため、教員が褒める場を意識的に設定している。

（質問：西原台小 西 康人）

- ・ 校長として地域とのつながりを作るために留意している点は何か。

（関連質問：岩川小 上原 大樹）

- ・ 特に離島では短期間での教員の入れ替わりもあるが、伝承する上での工夫はあるか。

（関連質問：馬根小 畑 隆宏）

- ・ 地域人材リストはあるか。また、校長だけでなく、他教員の地域との関わりはどうか。

（応答：上西小 畑 真一郎）

- ・ 体験活動の内容のほとんどは以前からあったものである。それを充実させる形で進めている。引継については、校長が教育課程で確実に申し送ることにしている。地域人材リストも作成し、活用している。

【グループ討議後の班ごとの発表】

（E班：住吉小 川添 正和）

- ・ 地域素材を生かした取組の発表だったと思う。ただし、新興住宅地のある校区であれば、地域で伝承されている行事等が少なく、取り組むことの難しさもある。地域コミュニティを活用し、地域をいかに

引き込むかが大切である。

- ・ 桜峰小の取組の紹介。東京都の学校及び国際大学との交流を紹介（桜島大根の栽培及び販売について）。（J班：伊集院小 渦尾 文輝）

- ・ 地域の素材を、道徳の教材化までに至らないのが現状である。管理職を含め、職員が地域の行事をよく理解しないまま取り組んでいると感じる。地域の魅力を伝えるには、まず、管理職自らが地域の魅力を捉えていくことが大切である。

【指導助言】

県教育庁高校教育課学校教育生徒指導班指導主事

福元 浩子

<上小原小の取組について>

- ・ 小中一貫、凡事徹底といった取組は、まさしく学習指導と生徒指導の一体化を目指す取組である。

<上西小の取組について>

- ・ 児童の登校動機につながる「学校魅力」は、校長の姿が大切であると実感できる取組である。

<発達指示的生徒指導について>

- ・ 鹿児島県の不登校の状況、いじめの認知件数の状況から、今後も児童生徒の自己有用感を育むことが重要である。（不登校者数：R元年度から小学校3.5倍、中学校2倍）（いじめの認知件数：一件でも多く丁寧に解決を。）

- ・ 自己有用感を育むためには自己肯定感を高めることが大切である。そのためには、自分の目標より少し高め目標を達成することである。その実感のためには、10歳までは大人が褒めること、10歳以上は友達に認めてもらうことが重要と言われている。特に、この「認める」ということが大切である。

- ・ これからの生徒指導は「発達指示的生徒指導」が大切である。生徒指導四つの視点「自己存在感の感受」「共感的な人間関係の育成」「自己決定の場の提供」「安全・安心な風土の醸成」を大切にして、日頃の教育活動を進めていく。

- ・ 川内北中学校の「魅力ある学校づくり」の取組もぜひ参考にしていきたい。

- ・ いじめの四つの構造にある「観衆」をどう育成していくか、道徳教育の充実を図っていただきたい。

（記録 下西小 神田 圭）

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

- 日 時 令和6年11月15日(金) 12:40~14:00
- 分科会 I 小学校 第6分科会  
「健康・安全教育」
- 研究主題  
「健やかで、たくましく生きる力を育む健康・安全教育」
- 協議題  
「自ら進んで心を鍛え、たくましい心と体を育てる健康教育の推進」
- 発表者 鹿児島市立星峯東小学校 福留 健之
- 司会者 鹿児島市立皇徳寺小学校 有村 暢高
- 記録者 鹿児島市立星峯西小学校 永里 智広

【質疑応答】

(質問：指宿市立柳田小学校 宮路 直子)

- ・ 様々な職員、子供・保護者・地域の人々がいる中で、校長としてどのようなことに留意しているか。
- ・ 今後、健康安全について考えていることは何か。

(応答：鹿児島市立星峯東小学校 福留 健之)

- ・ 職員とのコミュニケーションを積極的に図っている。例えば、朝の時間は、職員の健康状況の確認や個々の不安を取り除くために、校長室で話をするようにしている。
- ・ 教育課程にあるものを確実に進めることが大切だと考えている。今後は、もっと子供の活躍の場を前面に出しながら進め、元気で活気のある学校にしていきたい。

(感想・意見：鹿児島市立南小学校 高味 修一郎)

- ・ どの学校でも健康・安全教育は進めていると思う。星峯東小のように、それを確実に取り組み、充実させていくことが大切ある。そのためにも、体力向上、給食・食育、学校安全等を連動させていくことが重要である。

また、体育授業にも力を入れたい。運動に親しむ資質や能力を育てる意味で、主体的な体力づくりにつながる。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(E班：曾於市立光神小学校 三原 俊宏 )

- ・ 主に、食育の重要性が話題になり、各校の実践例で参考になる点が多かった。桜洲小は、栽培が難しい桜島大根を育てる中で、喜びや苦労を重ねながら、命を育てるという貴重な学びが実践されていた。

高来小では、米作りの作業を生産者と語りながら進めるとともに、最後は価格設定まで子供たちに考えさせていた。また、PTA組織に位置付けてある田んぼ係の方々や地域の方々の協力もあり、貴重な体験活動となっている。

光神小では、自作のサツマイモと柚子農家及び地元の加工食品業者と連携してカレー作りを実施した。作物も命あるものであり、大切にしなければならぬという意識が高まった。給食の残食も減ってきている。

また、古仁屋小では、課題となっているメディアとの関わり方について、家庭との連携を進めている事例の報告があった。

(A班：鹿児島市立清水小学校 竹下 健一郎)

- ・ 教職員のメンタルヘルスについて多くの意見が出された。

職員間のコミュニケーションが課題であり、ストレスを感じている職員が多い。また、職員によって業務改善に対する認識が異なり、熱心に業務にあたっている職員がやる気を失うケースも少なくない。そのことで、校務分掌組織が機能しない状況がある。

- ・ 保護者対応において担任だけでは解決できないケースが増えてきており、校長対応が多くなっている。これまで以上に、同僚性を発揮し、組織対応を工夫していく必要がある。

(F班：鹿児島市立宮川小学校 茶屋 大作)

- ・ 教育環境の大事さを痛感する。清潔できれいな環境が、人を守り人を創っていく。一つの手立てとして清掃の徹底を図っている。
- ・ 体力づくりは、継続することが難しい。教科体育の改善を進めつつ、時間外であっても子供が主体的に取り組むようにしていきたい。また、教育課程にある具体的な取組を、全ての学年がきちんとやること、そのために職員個々の実践力を高めていけるようにしていきたい。

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 14:15~15:25

○ 分科会Ⅱ 小学校 第6分科会

「健康・安全教育」

○ 研究主題

「健やかで、たくましく生きる力を育む健康・安全教育」

○ 協議題

「自ら危険を予知し、安全に行動する能力や態度を育てる安全教育の推進」

○ 発表者 徳之島町立亀徳小学校 越間 むつみ

○ 司会者 徳之島町立亀津小学校 池田 昌弘

○ 記録者 徳之島町立母間小学校 山本 克久

【質疑応答】

(質問:伊作小 福元 賀博)

- ・ 予算確保について、どのような経緯で外部団体事業に応募したのか。
- ・ 外部団体名、補助額等、可能な範囲で教えていただきたい。

(応答:亀徳小 越間 むつみ)

- ・ 防災についてネット検索する中で見つけたり、青少年赤十字の研修会に参加した際、事業情報をいただいたりした。
- ・ R5「アクサユネスコ協会減災教育プログラム」  
主催:公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 10万円

R6鹿児島県青少年赤十字活動推進事業

主催:日本赤十字社鹿児島県支部 5万円

(質問:宿利原小 濱田 直子)

- ・ 避難道の設置にあたり、町教委や関係機関と、どのように進めていったのか。

(応答:亀徳小 越間 むつみ)

- ・ 赴任前より設置依頼は要望している経緯はあった。R4年度からの学校の積極的な防災教育への取組を機会に、町議や地区役員と連携を図り実現した。

(質問:柏原小 橋口 大士)

- ・ 徳之島町北部にある東天城中校舎新築計画に関して、設計段階での校長の係り、地域防災拠点としての役割等、把握している範囲で教えていただきたい。

(応答:亀徳小 越間 むつみ)

- ・ 校長は、工程会議に参加していたが、設計に関しては直接関与していない。地域防災拠点に関しては、

4~5mの盛土をした後、新校舎建築に至っているが、地域防災拠点としての役割は担っていない。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(I班:天降川小 大山 政弘)

- ・ この取組のスタートの状況が話題となった。防災教育を経営の柱に据える際、校長の思いや職員の受け取り方について、もう少し詳しく知りたい。

(補足:亀徳小 越間 むつみ)

- ・ 前任地、隣接保育所が毎月訓練をしていたことや令和4年1月津波警報による避難を実体験したことで、必要性を強く感じた。特別な行事・活動は新設せず、朝活動や清掃の時間帯を活用した毎月の継続訓練に意味があることを説明し、職員の理解を得た。

(H班:菱田小 平山 淳郎)

- ・ 防災訓練の実効性を高める、回数を重ねる、シンプルな流れにする、そして、個での対応力を身に付けさせることが必要であるなど意見が出された。

【指導助言】

県教育庁保健体育課健康教育係主任指導主事兼係長

栗山 稔久

(発表内容から)

- ・ 1校目の発表は、健康教育の側面を保健、体育、食育指導から迫り、各領域が一体となった取組である。また、教育課程に位置付けられたものを丁寧に確実にやっている。

- ・ 2校目の発表は、災害安全を柱に児童・職員の意識向上、実効性、情報発信など、校長のリーダーシップのもと経営されている。また、外部機関との連携も密に行われている。

(県教委として等)

- ・ 歯と口の健康について、治療率向上以前に、学校・家庭における歯磨き指導等の予防教育の充実を図っていただきたい。

- ・ 「釜石の出来事」などの教訓や防災マップ作成、活用など、学校・家庭・地域が互いに発信し合い、防災教育の推進を図っていただきたい。

(メッセージ)

- ・ 一番大事なことは、【児童生徒の健康】である。「一人で帰らないように」「歯磨きして寝るよ」など、一日一声ある学校でありたい。

(記録 母間小 山本 克久)

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 12:40~14:00

○ 分科会 I 小学校 第7分科会

「人権教育」

○ 研究主題

「人間尊重の精神に基づき、共に生きる子どもを育てる人権教育及び特別支援教育」

○ 協議題

「子供一人一人の『ウェルビーイング』の向上を支える学校経営を軸にした人権教育の推進」

○ 発表者 さつま町立柏原小学校 石川 雅仁

○ 司会者 さつま町立山崎小学校 柳野 竜生

○ 記録者 さつま町立佐志小学校 渡邊 義幸

【質疑応答】

(質問:花峰小 佐多 瑞代)

・ 発表の最後の方で「方法が目的にならないように」とあったが、そこをもう少し詳しく教えてほしい。

(応答:柏原小 石川 雅仁)

・ 私たちの仕事の中では、方法が前面に出ることが多い。例えば、人間関係づくりでいうと、「構成的グループエンカウンターをどの学級も毎週しましょう」と提案することで、それが目的になってしまう教師もいるのが現状である。なので、丁寧に説明し、何のためにその活動をしているか咀嚼できるように発信していかななくてはならないと考える。

(質問:安房小 淵田 晋平)

・ 発表にあった「子供一人一人が大切にされる授業デザイン」はウェルビーイングの向上につながると考える。そこで、自由進度学習や学習者主体の学びなどを実現する授業に関する職員研修の在り方について教えてほしい。

(応答:柏原小 石川 雅仁)

・ 本校でも、現在進行形で模索している。昨年、着任した際は、「一斉指導の中での」自由進度学習ぐらいまでしか発展していない印象だった。学校で最も児童に接する時間は授業なので、授業改善を推進することが学校経営の根本になると考えて取り組んできた。最初は、トップダウンに近い形での研修だったが、間接的な働きかけで徐々に変容が見られるようになり、今では教師それぞれが授業改善への意見等を自由に伝え合える環境になってきている。特効薬はないが、涵養を促すことが大切である。

(質問:有明小 夏越 伸一)

・ ウェルビーイングの向上を図る学習活動について、学びの選択に関する提示等はどうしているか、自由進

度学習の評価はどうしているか、聞かせてほしい。

(応答:柏原小 石川 雅仁)

・ 学びの選択を複線化しようと、教師から提示して始めたが、高学年の児童はそこを飛び越えて4本目、5本目を考え出すので、上手く発展させている。

・ あ自由進度学習の評価は、ルーブリック評価等を作成すると、それを作成することが目的になりがちである。本校では、これまでの規準をABCと細分化して活用しながら、個に対応している。ルーブリック評価等はまだ作成していない。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(G 班)

・ あそれぞれ小規模校であり、全職員で児童一人一人に対して丁寧に対応している。

・ あ児童数が少なく、人間関係が固定されてしまうので、地域との連携を大切にしている。他にも、大学生を招聘したり、運動会に他校の児童を招待したりと、外部との交流を深め、行事等を充実させている。

(B 班)

・ どの学校でも、人権週間・月間や校長講話、児童会活動、標語募集、校内掲示など、継続的に取り組んでいる。職員研修では、水俣病やハンセン病などを取り扱い、人権意識を高めている学校もあった。全国からの留学制度を設けている学校では、保護者の生活背景が広く、その価値観等の多様性を受け止め、関係づくりをしていた。それぞれの学校で、人権教育を推進しているが、やはり繰り返し指導していくことが大切である。

(M 班)

・ どの学校も、自己肯定感を高めることを課題として取り組んでいる。発表校の数値の高さから取組が充実しているとわかるので参考にしていきたい。

・ あ人権教育の取組では、校内人権コーナーの工夫や児童一人一人の目標掲示と活用などで、その成長を見取るよう実践している。また、アイメッセージを意識した指導や保護者・地域と連携して児童を認め、褒める働きかけを推進している。さらに、体験活動をとおして、児童が自分や他者のよさを見付けることができるので、多様な体験活動も大切にしていきたい。

(記録 佐志小 渡邊 義幸)

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 14:15~15:55

○ 分科会Ⅱ 小学校 第7分科会

「人権教育・特別支援教育」

○ 研究主題

「人間尊重の精神に基づき、共に生きる子どもを育てる人権教育及び特別支援教育」

○ 協議題

「子どもの教育的ニーズに応え、一人一人が生き生きと輝く特別支援教育の推進」

○ 発表者 鹿児島市立武岡台小学校 榊 まゆみ

○ 司会者 鹿児島市立小山田小学校 野元 忠久

○ 記録者 鹿児島市立花野小学校 山下 佳子

【質疑応答】

(質問：八幡小 芝 隆志)

・温かい学校経営を感じる。職員の専門性の向上を図るため、校長として心がけていること、また柔軟な対応のための方策を教えて欲しい。

(応答：武岡台小 榊 まゆみ)

・専門職の向上に関しては管理職が積極的に関わり、児童の実態把握、専門機関との連携に努めている。また、落ち着かない児童を管理職が預かっていたりしている。市教委の特別支援アドバイザーを活用することで、専門的な知識に基づいたアドバイスが得られ、職員も納得しながら聞いている。児童の変容を皆で共有し、「皆で」ということを重点的に心がけている。

(質問：花峰小 佐多 瑞代)

・子供たちや地域、保護者へ特別支援教育の理解促進・啓発のためにしていることを教えて欲しい。

(応答：武岡台小 榊 まゆみ)

・学校だよりだけでなく支援部だよりも地域へ出している。子供たちのニーズに応える教育を目指している。

(質問：財部小 井手 英男)

・複数のコーディネーターを校内・校外と分けた取組はとても参考になった。利点を教えて欲しい。

(応答：武岡台小 榊 まゆみ)

・校内コーディネーターは校内の支援計画を立てる等校外は巡回相談等対外的な計画、就学指導に係る内容という分け方をしている。

(質問：大原小 久保田 昭二)

・小・中・高で連携をしていれば教えて欲しい。また、体制づくりで一番苦労したことは何か。

(応答：武岡台小 榊 まゆみ)

・小・中・高で巡回相談や交流学习、居住地交流をしている。体制づくりは、職員の意識を変えることが最も課題であった。理解ある職員とともに現在も体制づくりを続けている現状である。

【グループ討議後の班ごとの発表】

・支援員の体制はありがたい。子供同士の関わりをどうするかは課題である。授業を乱す子を多様性として許すのか、放っておくのか難しい。

・教諭育成の視点は大事。ベテランだけでなく、年数の浅い教諭にも特別支援学級を担任させることは必要である。就学指導の悩みとしては祖父母世代の理解が中々得られないことである。

・特別支援学級と通常学級担任の打合せ時間確保が難しい。また支援学級ではない児童で、支援が必要な児童が多数在籍している。学校規模にかかわらず、どの学校でも、様々な場面で課題が多いと思われる。

【指導助言】

県教育庁 特別支援教育課 小中高等学校係 主任指導主事兼係長 前田 博美

・1校目の発表はウェルビューイングの向上を図るための、学習活動づくり・人間関係づくり・環境づくりであった。自由進度学習においては、めあてやまとめがどう設定されるのかという疑問がよく聞かれる。めあてはこれまで一つだったものが、一人一人のめあてになり、まとめもノートやロイロに個別にまとめさせることになる。ユニバーサルデザインの視点をもって改善していくとうまくいくと考える。その際、安全確保や環境整備は大事な視点である。

・2校目の発表では、校内の意識向上・教職員の資質向上がテーマであった。ポイントは関係機関との連携である。特別支援学校等専門家と連携しアドバイスをもらうことで分かりやすい授業への改善とつながる。

・インクルーシブ教育は、校長のリーダーシップが大事である。子供の困り感がどこから来るのか、専門家の意見を参考にしつつ、学びをサポートしてほしい。

(記録 花野小 山下 佳子)

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 12:35~14:00

○ 分科会 I 小学校 第8分科会

「国際理解教育」「環境教育」

○ 研究主題

『広い視野で考え、実践力を高める国際理解教育及びキャリア教育』

○ 協議題

～人間理解を基調とし、異文化に触れたり外国語によるコミュニケーションの基礎となる資質・能力を高めたりする国際理解教育の推進～

「子供に夢や目標を持たせるキャリア教育の在り方」

○ 発表者 垂水市立新城小学校 有村 重輝

○ 司会者 垂水市立松ヶ崎小学校 西 武久

○ 記録者 垂水市立柊原小学校 竹井 敏秀

【質疑応答】

(質問：大龍小 原口 雅也)

・マイクラフトの良さ・効果・他校への広がりには、どのようなものがあるか。

・キャリアパスポートの中学校との連携の現状はどうか。

(応答：新城小 有村 重輝)

・デジタルプログラミングのブロックを動かせるので子供たちも扱いやすい。地域の課題へ取り組みやすい。有償で行っているため、市全体としての取り組みは、今後の課題である。

・キャリアパスポートは、卒業時に引継ぎを行っている。

・

【グループ討議後の班ごとの発表】

(E班：協和小 弓指 修)

・国際理解・キャリア教育については、地域（農業・産業・文化）との連携が重要である。

・高校生の活用を積極的に推進することが有用だと考える。

(B班：西出水小 坂之上 辰志)

・英語については、児童に浸透していないのではないか。楽しみが減り、書くことへの抵抗があるためか。

・今後、地域に日本語を話せない外国出身者が増えてくるのではないかと。家庭環境調査票など書いてもらう

のに、課題等が出てくるかもしれない。

・キャリアパスポートについては、児童が主体的に取り組めるように学級活動で積極的に取り組むほうが良いのではないかと。賞状等の写真も保存すること、自己肯定感も高まると思う。地域とのつながりについては、学校運営協議会を通じてお願いすることも大切ではないかと。

(G班：垂水小 北川 政人)

・SET 加配については、授業充実または業務改善につながっている。観光客相手に児童が積極的に交流をもつ学校がある。

・夢を掲示し、自己肯定感を高められる取り組みをしている学校がある。

・校長として、キャリア教育の視点で話をしていくことも大切である。

【指導助言】

県教育庁高校教育課学校教育ICT推進班指導主事

時任 志郎

・教科横断的グランドデザイン、コミュニケーションの能力の育成、郷土教育の視点での研究をされていたが、市・地域の協力を得ながら、児童が主体的に取り組む、夢を持って取り組める環境を構築できているところがよかった。

・グローバルな解決を推進するためには、日本人としての誇りをもつことが大切である。

・マイクラフトの取り組みについては、児童が本当に楽しく取り組んでいる姿が素晴らしいと感じました。

・いつでも児童生徒が学ぼうとするとき、その環境を整えてあげるのが、我々学校現場で働く教職員の務めである。

(記録 柊原小 竹井 敏秀)

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 14:15~15:35

○ 分科会Ⅱ 小学校 第8分科会

「情報教育」

○ 研究主題

「広い視野で考え、よりよい社会を協働して形成していく実践力を高める国際理解教育, 環境教育, キャリア教育, 情報教育」

○ 協議題

「情報活用能力の育成と情報モラル教育を踏まえた情報教育の推進」

○ 発表者 南さつま市加世田小学校 喜島 宏明

○ 司会者 南さつま市立小湊小学校 小島 俊明

○ 記録者 南さつま市立川畑小学校 宮ノ前 香織

【質疑応答】

(質問: 明和小 松久保 鉄也)

・ グーグルサイトは, どの学校でも作成し活用することができるか。

(応答: 加世田小 喜島 宏明)

・ 可能である。今年度の短期研修で学び, 利活用している。加世田小のグーグルサイトのQRコードを配布資料に添付してあるので, 県域ドメインでアクセスしてみしてほしい。現在の運用は, 校長が行っているが, 引継が必要な場合も想定し, その準備も同時に進めている。

(質問: 明和小 松久保 鉄也)

・ パワーポイント資料中の「学習の基盤となる情報活用能力の育成段階表」は, どのように作成されたものか。これまで目にしたことがなかったので, 明確な出所があれば参考にしたい。

(応答: 加世田小 喜島 宏明)

・ 文科省と熊本市の実践を参考にし, 作成した。

(質問: 油久小 池田 洋子)

・ タイピングスキルの向上のための特化した時間を設定しているか。

(応答: 加世田小 喜島 宏明)

・ 特化した時間の設定はしていない。市全体で導入されている「キーボー島アドベンチャー」やアクセスが可能なタイピングレッスンのできるサイ

トを活用して, 各教室でできる時間に行っている。

(質問: 油久小 池田 陽子)

・ 夏季休業中に校内で実施した校長室におけるミニ研修会について詳しく知りたい。

(応答: 加世田小 喜島 宏明)

・ 参加を希望する職員のみで, 少人数で複数回行った。PCやタブレット端末を活用することに苦手さを感じている職員もいるので, 共に作業をし, できるようになるまで待つことを心がけている。グーグルサイトはお気に入りに追加させ, いつでも開けるようにしている。校内研修の他, 南さつま市では, 市教委が主導してのオンライン研修会もこれまでに18回ほど実施され, またICT支援員の派遣もあるので, 充実した研修ができています。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(L班: 川尻小, 竜門小; 発表, 宮浦小)

・ 南さつま市が早くから組織的に情報教育が進んでいることは知っていたが, 更にシステム化されていることに驚き, うらやましさも感じる。ソフト面もハード面も市町村によって課題も多く, 難しい面も多いが, とにかく児童にも職員にも使わせることでスキルやモラルの向上を図るべきであることを, 一層強く感じている。

(I班: 上市来小, 中福良(霧), 星原小; 発表, 柗原小)

・ 実践が足りていないことを実感したと同時に, 各市町村で実態が大きく異なっている状況が明確になった。市町村全体でベクトルが同じであれば, 南さつま市のように推進も早く深い。予算化等の影響が非常に大きいと感じる。モラルについては, 学校外のSNS上のトラブルについてどこまで立ち入るべきかが話題に出た。

【指導助言】

県教育庁高校教育課学校教育ICT推進班指導主事

時任 志郎

・ 教育版マイクラフトやグーグルサイトの活用等, 校長自らが率先してICTを活用し, 職員へ情報を提供したり苦手な職員に寄り添ったり等, 参

考にしたいすばらしい実践である。

- ・ タブレット端末の児童主体の活用が全県的な課題である。全国学力・学習状況調査質問紙において、活用率は全国よりも高いが、教師と児童の活用の実感度に差がある。教師主導だけでなく、児童自らが日常的に文房具の一部として、また学習のツールとして、更に活用を図るべきである。
- ・ タブレット端末は、個別最適な学びや協働的な学びを推進する上でも必須アイテムである。また、働き方改革を実証する上でも大きな役割をもつことを常に意識することが大切である。
- ・ 子どもたちの「未来」「これから」「あした」とつながるこれからの社会像として、
  - ① 持続可能な社会づくり
  - ② 多様な子供たち一人一人の豊かで幸福な人生
  - ③ グローバルな協働
  - ④ 変化の加速化・非連続化・生涯にわたって学び続ける力
  - ⑤ 想像以上の速さで変化することをチャンスと捉える力
  - ⑥ セーフティネットとしての学校の本質的役割の再認識が挙げられる。何故目指すのかを明確にし、意識をもち続けることが大切である。
- ・ 学習指導要領前文にもあるように、一人一人の児童生徒が自分のよさや可能性を認識するためにも、「学んだ力」「学ぶ力」「学ぼうとする力」の3つを合わせた学力を育てることが重要である。

# 中学校分科会研究主題

分科会	研究主題	趣 旨	協 議 題	頁
第一分科会	教育課程・評価の工夫	<p>生徒一人一人に応じたきめ細かな指導や体験活動等の充実を通して、確かな学力や豊かな人間性などの「生きる力」を育み、新しい時代を拓くことのできる知・徳・体の調和のとれた人間を育てることが求められている。</p> <p>そのためには、各学校が創意・工夫を生かした特色ある教育課程の編成・実施・評価を確実にいき、充実した教育活動を展開していくことが重要である。具体的には、基礎・基本の定着や学ぶ意欲、自ら考え主体的に判断する力等の確かな学力の向上、指導と評価の一体化を目指した適正な評価の在り方について研究を深める必要がある。</p>	<p>知・徳・体の調和のとれた特色ある教育課程の編成・実施・評価</p>	80
				84
第二分科会	教職員の意識改革と資質能力の向上	<p>学校は、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力等の育成に加え、いじめ・不登校など生徒指導上の諸問題への対応、特別支援教育の充実など複雑かつ多様な課題に対応するなど、教師力の向上が求められている。</p> <p>そのためには、マネジメント力を有する校長の強力なリーダーシップのもと、専門職としての高度な知識・技能を身に付ける意図的・計画的な校内研修をはじめ学校内外の研修を通して教職員の資質能力の向上を図っていく必要がある。また、教職員一人一人の職務遂行上の意欲、能力、実績等の評価を通して、学校組織を活性化させる人事評価制度の効果的な運用とその研究、並びに評価者としての資質能力の向上について研究を深める必要がある。</p>	<p>(1) 教師力の向上を目指した研修の充実</p> <p>(2) 自己成長を促す人事評価制度の効果的な運用</p>	88
				92
第三分科会	道徳教育・人権教育	<p>思いやりの心の欠如や倫理観・規範意識の低下など、生徒の心の問題は依然として憂慮すべき状況にあり、道徳的実践力を高める道徳教育の充実や同和教育をはじめとする人権教育の充実が求められている。</p> <p>そのためには、学校は道徳の時間の充実とともに、豊かな自然体験や社会体験等の活動を取り入れ、すべての教育活動を通して道徳的価値に基づいた人間としての生き方についての自覚を深めさせる必要がある。また、人間尊重の精神を基盤に据えた指導に努め、生徒一人一人の人権意識を高めるとともに、偏見や差別をなくしていこうとする意欲と実践力を育てる教育の充実について研究を深める必要がある。</p>	<p>(1) 道徳的実践力を育てる道徳教育の推進</p> <p>(2) 自他を大切にすることや実践力を育てる人権教育の推進</p>	96
				100
第四分科会	キャリア教育・生徒指導	<p>生徒一人一人の勤労観・職業観を育て、社会的・職業的自立を目指す教育を推進するためには、生徒の発達段階や系統性を踏まえ、多様な実践的・体験的な活動を計画的、組織的、継続的に進めることが大切である。また、心身の発達に配慮した望ましい集団活動を通して、自律的・実践的な態度を育てることが大切である。</p> <p>そのためには、進路指導において生徒の自己実現に向けた意欲付けと、全教育活動を通してキャリア教育の充実を図る必要がある。また、社会の一員としての自覚を高め、将来にわたって生徒自らが自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指した積極的な生徒指導について研究を深める必要がある。</p>	<p>(1) 目標をもち、自己実現を図るキャリア教育の系統的推進</p> <p>(2) 豊かな人間性や社会性を育む生徒指導の充実</p>	104
				108
第五分科会	開かれた学校づくり	<p>学校は、その目的を達成し、地域住民の信頼に応えるために、家庭や地域社会と連携し積極的に教育活動を展開しながら、地域に開かれた学校づくりに努めることが重要である。</p> <p>そのためには、学校の教育活動や学校の運営実施状況について、自己評価したり学校関係者評価（外部評価）等を行ったりして、その結果を保護者や地域に説明するとともに、学校経営の改善に生かす必要がある。また、外部の人材を活用したり、学校の施設や学習の機会を提供したりするなど、地域社会との連携の在り方について研究を深める必要がある。</p>	<p>(1) 地域社会と連携した信頼される学校づくりの推進</p> <p>(2) 教育課程の自己点検・自己評価等と学校関係者評価（外部評価）の充実</p>	112
				116

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 12:30~13:50

○ 分科会 I 中学校 第1分科会

「教育課程・評価の工夫」

○ 研究主題

『生きる力』を育成する教育課程の編成・実施・評価～よりよい『総合的な学習の時間(ひおき学)』をめざして』

○ 協議題

「知・徳・体の調和のとれた特色ある教育課程の編成・実施・評価」

○ 発表者 日置市立日吉学園 松尾 明

○ 司会者 日置市立土橋中学校 柚木 義哉

○ 記録者 日置市立吹上中学校 波戸 三幸

【質疑応答】

(質問:溝辺中 東 浩二)

・ 20年間続いていた焼酎づくりは一切やめたのか。

(質問:里中 加藤 晃一)

・ 焼酎づくりをやめることについて、職員の反対があり説得したそうだが、地域住民や保護者の反対はなかったのか。

(応答:日吉学園 松尾 明)

・ 地域の企業である小正醸造はつながりの深い会社であり、焼酎づくりに変え工場見学を実施し、今後ともつながりを大切にすることで、納得していただいた。

・ 地域や保護者の反対については、最近では、焼酎の芋植えのみ保護者2名程度が参加する関わりだったため、反対はなくスムーズに実施できた。

(質問:串木野中 森本 信一)

・ 総合的な学習の取組で「CAPD」サイクルが活用され、機能していることはわかった。それ以外で「CAPD」サイクルを活用して進めていることはあるか。

(応答:日吉学園 松尾 明)

・ その他では「研修」での活用がある。必ずC(評価)からスタートし、課題を明らかにして取り組むことにしている。

(質問:安房中 鶴田 荘太)

・ ひおき学はいつからスタートしたのか。

(応答:日吉学園 松尾 明)

・ H29年からスタートしている。今回日吉学園は総合を中心に取り組んでいるが、「知・徳・体」3つの分野での取組である。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(A班:加治木中 塩津 一弘)

・ 総合的な学習の課題について話し合った。日吉学園の発表にあったように、課題は、職員を変えることだということが話題に上った。

加治木中でも探究的な学習を「エンジン」と名付け年間20時間実施している。発表の場は文化祭で、企業の力も借りて運営している。また、小中連携についても課題があるという話が出された。

(H班:亀津中 政岡 健作)

・ 総合的な学習の時間の編成や実施について話し合った。

海星中ではふるさとコミュニケーション科で地域の産業に学ぶ学習に取り組んでいる。小中連携による取組も行われている。

喜界中では喜界学という名前で、島口・島唄など中高一貫での学びを行っている。ジオパークについての学習もあり、大学の協力もいただき、探究的な学習に取り組んでいる。

亀津中では、徳之島学という名前で、副読本を使って地域と一体になった学びが実現できている。

質問・・・日吉学園の場合、総合的な学習で学んだことをどのような場面で発表しているか。

(応答:日吉学園 松尾 明)

・ 発表はやはり文化祭の場で行っている。3つの班に分かれ、パワーポイントを使って発表を行った。せつぺとべ班は生歌を歌ってもらい、踊りも披露した。保護者は、私たちが知らなかったことがあったと話し、勉強になったと大変好評であった。

前期課程も、総合的な学習の学びを発表する場を設けたいと提案しているが前期課程の先生方は、「小学校では学習発表会は、もうしないですよ」となかなか進まない現状がある。「表現なくして思考はない」と考えているので、なんとか中学生のような発表の場をつくっていきたい。

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 14:15~15:35

○ 分科会Ⅱ 中学校 第1分科会

「教育課程・評価の工夫」

○ 研究主題

『生きる力』を育成する教育課程の編成・実施・評価

○ 協議題

「知・徳・体の調和のとれた特色ある教育課程の編成・実施・評価」

○ 発表者 徳之島町立東天城中学校 大田 耕造

○ 司会者 徳之島町立手々小中学校 廣瀬 孝一

○ 記録者 徳之島町立井之川中学校 園田 泰浩

【質疑応答】

(質問：串木野中 森本 信一)

・ 中1ギャップ等による不登校状況及び学校の対応等の在り方について教えてほしい。

(応答：東天城中 大田 耕造)

・ 現在、複数名の欠席しがちな生徒が在籍している。その対応策として、これまでの生徒会室を個別相談室として活用して学習支援等を行った結果、欠席日数が減少した生徒もみられるようになった。

(質問：南指宿中 川畑 哲也)

・ 防災に関する取組についてくわしく教えてほしい。

(応答：東天城中 大田 耕造)

・ 総合的な学習の時間を含め、毎年10回、「レスキュータイム」として実施している。

・ 交通安全教室や避難訓練、保健体育科の授業(心肺蘇生)の前後でレスキュータイムを実施することで、関連する知識等を深めることにつながっている。

(質問：吉田南中 平田 睦)

・ 防災に関する取組に力をいれるようになったきっかけを教えてほしい。

(応答：東天城中 大田 耕造)

・ 東天城中は海岸に近い海拔3メートルに立地しており、津波で甚大な被害を受ける危険性が高い。また、交通経路等の遮断等により救助活動が困難になることが予想されるため力を入れて取り組んでいる。

・ 文部科学省の令和2年度・3年度学校安全総合支援事業指定地区として「防災教育」に取り組んだこ

とを継続して実施している。

(質問：伊仙中 寿山 敏)

・ 放課後のチャレンジタイムで活用しているプリント作成等における意図や注意点等があれば教えてほしい。

(応答：東天城中 大田 耕造)

・ 今年度は学習アプリを活用している教科が多い。生徒はタブレットを使いながら積極的に取り組んでいる。

(質問：伊仙中 寿山 敏)

・ 学校独自で実践していることと行政機関からの依頼の下、連携を図りながら実践していることについて、教育課程編成上の工夫があったら教えてほしい。

(応答：東天城中 大田 耕造)

・ 町から企業等との連携依頼等がある場合は、本校の教育的課題の解決に向けて、どのような実践が効果的か、しっかりと検討することを心掛けている。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(G班：吹上中 波戸 三幸)

・ 吹上中で行っている母校貢献活動及び中学校職員(中学生の補佐付き)による小学校での乗り入れ授業等を実践することで、郷土に対する愛情深い学校となっている。1年生の郷土学習「吹上のためにできること」をテーマとした研究を地域と連携して実践している。また、学校としても地域からの様々な依頼等には応えるようにしている。外部講師についてはオンラインによる活用も検討してはどうか。

(D班：高尾野中 鷲見 博生)

・ 地域の特性を生かした総合的な学習の時間の工夫として、内之浦中の「宇宙教室」、高尾野中の「ツルクラブによる朝の観察」、西指宿中の「西中ラーニング」の紹介があった。坂元中では「心の健康教育」の一環として朝の体操を取り入れたところ、不登校生徒の減少につながったこと等の報告があった。また、ミドルリーダーの活用・育成についての意見交換があった。

(E班：野田中 瀬上 盛人)

・ 特色ある教育活動に関する教育課程編成に当たり、悩んでいることや苦勞していること等について話し合われた。特に体育大会の時期や開催方法を変更し

た学校については、他の行事（文化祭や新人戦）との調整で苦勞したことなどの発表があった。また、緊急時に学習を止めないための手立てや不登校生徒対応としてオンライン授業を活用することが予備時数の削減にもつながるのではないかな等の意見交換がなされた。

#### 【指導助言】

県教育庁義務教育課義務教育係主任指導主事兼係長  
假屋 一成

#### ・ 実践発表について

いずれの学校も地域に根差した素晴らしい実践を行っている。

##### 〈日吉学園の実践〉

教育課程を編成し、それを基に教育活動を展開していくことを通して学校教育目標の実現を目指す、研究の視点については学習指導要領に示されている教育課程編成に当たってのカリキュラム・マネジメントの3つの側面を反映したものである。

CAPDサイクルにより教育課程の実施状況を評価して改善を図るとともに、教育課程実施に必要な人的・物的体制を確保することで、児童生徒がふるさと日吉に愛着や誇りを持てるようになってきたことが取組の成果から分かる。

##### 〈東天城中の実践〉

研究の視点(1)、(2)については中央教育審議会答申に関係ある言葉（不易と流行）、(3)はカリキュラム・マネジメントの側面にもある教育課程実施に必要な人的・物的体制を反映したものである。

特色ある教育活動については東天城中だけではなく町全体として実践してきたことが分かる。

- ・ 教育課程編成と学習指導要領との関わりについて  
現代社会や学校における課題を解決するためには、教科等横断的な視点で取り組まなければならない。様々な教科と組み合わせながら実践するためには、例えば日吉学園の実践にあるように総合的な学習の時間系統表を作成し、全ての教科で関連付けながら取り組むことが大切である。

また、言語能力の育成はすべての教科に関わることである。

21世紀型の資質・能力は、各教科がそれぞれの役

割を果たすことと教科の連携・横断により育てられる。

2校の実践発表にもあったが、教育課程の実施（授業・事業）状況を評価して改善を図る必要がある。また、計画を立てる前の段階における状況分析・状況把握（リサーチ）が重要である。

どの期間（年間・学期・月）をサイクルとするのかがPDCAの着眼点である。

目標と計画からのカリキュラム・マネジメントとして、学校教育目標に明示されている習得させるべき資質・能力から教育課程を編成する。また、授業の振り返りからのカリキュラム・マネジメントとして、日々の授業を振り返り、単元を振り返り、年間指導計画を振り返り、年間指導計画を基にしたカリキュラム評価を行う。

教育課程の実施に必要な人的または物的な体制を確保し、資源（人・物・金）を活用して授業・事業を設計する。

人の活用としては校内（学級担任、教科担任、養護教諭等）、校外（保護者や地域の方）がある。

物（施設）の活用としては、学校だけではなく校外の施設活用も検討する。また、有効な教材・教具の活用についても推進する。

学校予算の獲得や時間という資源の活用も大切である。

カリキュラム・マネジメントを機能化するためには校長・教頭のビジョン、ミドルリーダー（教務主任・研修主任・各担当主任等）のリーダーシップ、教職員の参画意識が欠かせない。

#### ・ 今後の動き

今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会論点整理から、「多様な個性や特性、背景を有する子供たちを包摂する柔軟な教育課程」、「学習指導要領の趣旨の着実な実現を担保する方策や条件整備」、「学習指導要領の趣旨の実現に向けた政策形成・展開」についての説明があった。

（記録 井之川中 園田 泰浩）

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

- 日 時 令和6年11月15日(金) 12:40~14:00
- 分科会 I 中学校 第2分科会  
「教職員の資質向上」
- 研究主題  
「教職員の意識改革と資質能力の向上」
- 協議題  
「教師力の向上を目指した研修の充実」
- 発表者 志布志市立志布志中学校 徳重正宏
- 司会者 志布志市立松山中学校 中村幸一郎
- 記録者 志布志市立有明中学校 勝田隆志

【質疑応答】

(質問：川内北中 感王寺等)

・6限カットで教科部会等をする際部活動の設定は、実施する場合は生徒の安全管理はどうしているか。

(応答：志布志中 徳重正宏)

・会合は部活動と並行して実施。部活動は長時間にならないように危険を避ける活動を中心に行っている。

(質問：鶴荘学園 橋野正毅)

・人事評価の視点と提示で参考にしているものは？

(応答：志布志中 徳重正宏)

・以前の上席からの資料や他校の取組を参考に、自身の経験から作成、提示している。特に若い先生に分かりやすいものとなるよう配慮した。

(質問：細山田中 田之上由美)

・校時表の見直しの件で、職朝及び朝活動(読書・学習・集会等)をカットしたことによる反応や変容は？

(応答：志布志中 徳重正宏)

・職員は学校が落ち着いたという印象をもっている。集会活動はできている。職員の打ち合わせは金曜の放課後に終礼を実施。出張等で全員が揃わないこともあり、シースマイルを活用した伝達を行っているがその点は課題。学年の打ち合わせも週1回実施。

(質問：霧島中 伊地知勇)

・通学方法に関して。バス通学生など下校時間の変更等に困難な点はないか。また、先生方の退校時間に効果が出ているか。

(応答：志布志中 徳重正宏)

・本校もタクシーバスで通学している生徒がいる。迎えの時間までに部活動を終わらせるなど配慮している。

全体的には自転車通学と保護者送迎が多い。自力登校を勧めているが、遠距離から登校している生徒もいて難しい実態もある。職員の退校時刻は、4年前と比べて1時間くらい早まっている。計画的な業務遂行を呼びかけている。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(Bグループ：北指宿中 有村宏史)

・志布志中の校時表の見直し、継続的な教科部会、ゴールを学力向上にした同僚生に繋げる取組は大変参考になった。私たちは3つの視点で話し合った。まず時間の確保。8:30から職朝なしで授業を始めたり、校時表に作業なしや職朝と作業なしで放課後の時間を生み出し会議等に活用したりしている学校も。シースマイルを活用し、ペーパーレスや職朝を減らす学校が増えている。二つめに資質向上。研究授業を一人年1回は実施し、教科を超えた授業研究を行っている取組。毎週、授業の様子を共有し、今後の方針等を話し合う学力向上推進委員会を実施する学校も。三つめは校外研修。職員がなかなか希望しない実態、校外に行く先生が限られている。また、職員全体へ還元が困難、志布志中のショート研修の取組を参考にしたい。

(Eグループ：川内北中 感王寺等)

・各学校40代のミドルリーダーが少ない、30代の職員をどう育てるかが話題になった。更に新採や50代のベテラン、再任用の職員が増えている現状にどう関わっているか、同僚性をどう高めていくかが課題であり悩みである。同僚性を高めるために、担任に副担任を複数人付けたり、学年担任制を実施したりしている学校もある。このような取組も同僚性が高まっていくのではないかと考える。職員の研修意欲を高める点では、その職員の意味によるところが大きく、なかなか厳しい。最終的には関わり続けていくしかないのではと考える。志布志中の校時表の見直しの取組は、このままの現状を続けていくのか。生徒の自立的な力が育てば、校時表を戻すなど職朝を復活させていく考えがあるのか知りたい。

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 14:15~15:55

○ 分科会Ⅱ 中学校 第2分科会

「教職員の資質向上」

○ 研究主題

「教職員の意識改革と資質能力の向上」

○ 協議題

「自己成長を促す人事評価制度の効果的な運用」

○ 発表者 南九州市立川辺中学校 萩原 聖司

○ 司会者 南九州市立頴娃中学校 飯山 哲志

○ 記録者 南九州市立知覧中学校 坂元 誠司

#### 【質疑応答】

(質問：牧之原中 田中 伊礎子)

- ・ 評価者と被評価者の評価が乖離している職員にどのように対応しているか。

(応答：川辺中 萩原 聖司)

- ・ 根拠(セルフチェックシート)をもとに話をするようにしている。

(質問：川内北中 感王寺 等)

- ・ 評価が始まった頃、Bは標準という位置づけだと考えていたが、Aでなければならぬという捉え方をしつつある。Bは標準という捉え方は継続なのかどうかを指導助言のときに指導いただきたい。

#### 【グループ討議後の班ごとの発表】

(A班：中央中 脇 正博)

- ・ 初任者が多い学校では、丁寧に説明し、年度ごとに目標等を変えるような指導を行っている。
- ・ 学校教育目標、グランドデザイン、生徒の授業に対するアンケート等を活用して評価をしている。また、教育センターの自己を振り返るツールを活用しながら内省を促すような取組を行っている学校がある。

(D班：大和中 窪田 雅彦)

- ・ 能力評価の観点の明確化について、客観的評価が必要なのかということが話題になった。人事評価の目的が本人の資質向上や組織の活性化ということであれば、柔軟な視点での評価があつてよいのではないかと考えて、チェックシートが必要なのかということが話題になった。
- ・ C、Dを付けることへの抵抗感、臨時的任用教職

員及び会計年度任用教職員のように単年度で異動する教職員の評価の難しさなどが話題になった。

#### 【指導助言】

県教育庁教職員課小中学校人事管理係主幹

栗山 義人

(人事評価にについて)

- ・ 人事評価の目的は、教職員の資質向上と組織の活性化である。評価が変わらなかったとしても、職員の資質向上が図られているという実感がもてることが大切である。

(人事評価に係る国の動向)

- ・ 今年度、質の高い教師の確保について答申が出され、質の高い教師の確保が柱になっている。背景には、全国的に全教職員に占める50歳代の割合(鹿児島県中学校48.9%、小学校50.2%)が高く、ミドルリーダーが少ないため、新規採用の教職員が先輩教員から学べる環境にない。このような中で、計画的に組織的に教職員の資質向上を図っていかないと危ういという危機感が国にある。

- ・ 中教審の議論の中で教師の学びに大枠2種類あるとあった。「経験を振り返ることを基礎にした学び」「他者との対話から得られる学び」を有機的に結び付けていくことが大事であるといわれている。

(実践発表について)

- ・ 徳重校長の実践は、校時表を見直し、教科部会の確保に努めたことで、「他者との対話から得られる学び」に焦点化した取り組みになっている。教科部会の実施に当たって、教科部会の目的や意図を人事評価の当初面談の場でしっかりと伝えており、プロセスが丁寧である。それが質の高い同僚性を育てている。心理的安全性、協働性にもつながる実践である。
- ・ 民間コンサルタント会社によると、業務改善のポイントは自助、共助、公助に分け取組を進めることが重要であり、個人、学校裁量で進められることが8割を占めるとのことであった。
- ・ 川辺中の萩原校長の実践は、ややもすると学校経営と各教職員の実践が乖離することがあるが、人事評価を媒介にして結び付けている。学校経営と自分の実践を結び付けて考えられることで、学校経営の参画意識の高まった学びの場になる。「他者との対話

から得られる学び」につながる実践になっている。

- ・ 校長、教頭に求められる資質に「ファシリテーション」がある。相互関係をよくする意味合いで、「ファシリテーション」に力を入れて実践をしている。
- ・ チェックシートを活用して、「アセスメント」も大切にしている。

(最後に)

- ・ 心に残っているある校長の話に「いい先生になることはできないが、いい先生になろうと努力することはできる。それをどう伝えるかが校長の役割だ。」との話があった。本日の発表や協議をとおして、校長の役割の大切さを改めて認識した。

(記録 知覧中 坂元 誠司)

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 12:35~16:00

○ 分科会 I 中学校 第3分科会

「道徳教育・人権教育」

○ 研究主題

「豊かな心を育み、人間尊重の精神と実践力を育てる道徳教育と人権教育」

○ 協議題

「道徳的実践力を育てる道徳教育の推進」

○ 発表者 阿久根市立三笠中学校 徳重 忠彦

○ 司会者 阿久根市立鶴川内中学校 井久保 康彦

○ 記録者 阿久根市立阿久根中学校 福島 慎一

【質疑応答】

(質問：吾平中 松下 幸男)

- ・ 小学校3校との連携の様子を、会合の頻度や職員がどう関わったかも含めて教えて欲しい。

(応答：三笠中 徳重 忠彦)

- ・ 年間に5回会合を持って、そのうち3回は教育長も参加して下さった。まずは教育目標を、「お互いに問うたときに直ぐに出る言葉」を基本に、各学校に持ち帰り、先生方に案を出してもらい、出てきたワードをもとにすり合わせて決めた。

(質問：開聞中 久徳 寛司)

- ・ 伝統芸能の山田楽は2つの小学校でそれぞれ取り組んでいる物を、中1に持ってきたのか、それとも一緒に取り組んでいるのか。
- ・ 昼休みの子供たちの教え合いについては職員の反応はどうか。子供たちの自主的な活動から職員が参加するようになったのか。

(応答：三笠中 徳重 忠彦)

- ・ 折田小は中学校区が3つに分かれていることから、三笠中に入学しない保護者からの反対もあるが、市がバスを出してくれて、夏休みに5回程度集まって練習をしている。目的としては中学校に上がったときに学校差があるので学校として取り組みたいということで理解してもらっている。脇本小は6年生が5年生に指導し、次の年に中1で実施している。また、神社への奉納も行っているため、今後は折田小や中学校としても参加できないかと考えている。
- ・ 教え合いは令和元年度から実施されてきたが、今

年度本当に子供たちはやりたいかを職員に投げかけてアンケートを実施した。子供たちの方からかなり高い数字でやりたいという意見が上がってきたので継続を決めた。職員は見守る形で入るが、入らない職員もいる。

(質問：喜入中 岡元 次郎)

- ・ 道徳の授業に関して、同じ指導法、同じ教具とあるが、中学校側が小学校の指導法に寄せたのか、双方で話し合い共通実践事項等を決めたのか。

(応答：三笠中 徳重 忠彦)

- ・ 研究会に向けて小中で一緒に取り組んだ。指導法については、小学校の研究公開に殆どの職員が行って、授業を見て理解した上で小学校の手法を取り入れた。今後はお互いに話し合いながら進めていくが、あまり乖離しないように小中連携を行っていききたい。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(C班：天保山中 今井 誠)

- ・ 中学校の道徳は指導が難しい。教科化されたり、タブレットが入ったりすることで変化は出てきているが、生徒も「分かっている」という感覚から自覚化まで持つて行くのが難しい。授業については学年部全員でローテーションを組んで実施している学校も増えてきているが、教師の意識の差がまだまだある。小中連携の面では教科よりも道徳・学活が共通実践は取り組みやすい。

(F班：喜入中 岡元 次郎)

- ・ ローテーション授業をしている学校や、全教育活動での取組みとして、朝のソーシャルスキルトレーニングを生徒会活動の中や総合的な学習の時間とコラボしている学校もあった。道徳的実践力を高めていくためには自己有用感、所属感がキーワードになる。役割を与え、出番を与えて賞賛をしていくことで生徒の心情が高まって行くのではないかと。褒める教育に徹したいという意見も出された。

(B班：甲東中 石岡 秀久)

- ・ 道徳は教科の壁を越えて先生方全体で取り組める。授業は教員の資質による部分が大きいのでそこをどのようにしていくかが課題である。掃除や行事等の教育課程全般で道徳的実践力を養っていく機会を持つことが重要である。

- 日 時 令和6年11月15日(金) 14:15~15:55
- 分科会Ⅱ 中学校 第3分科会  
「道徳教育・人権教育」
- 研究主題  
「豊かな心を育み、人間尊重の精神と実践力を育てる道徳教育と人権教育」
- 協議題  
「自他を大切に作る心や実践力を育てる人権教育の推進」
- 発表者 湧水町立栗野中学校 南郷 美幸
- 司会者 伊佐市立菱刈中学校 慶田 弦
- 記録者 伊佐市立大口中央中学校 竹ノ山 誠忠

【質疑応答】

(質問：面縄中：福永 隆幸)

- ・ 自己肯定感を高めるための実践について、スマイルボックスの活用方法を具体的に教えてほしい。

(応答：栗野中：南郷 美幸)

- ・ 設置場所は生徒職員教養の玄関で、いつでもかけるようにペンと紙を準備し、生徒会が掲示している。発案も生徒会の意見をもとに広げて実践した。

(質問：金久中：当田 進一)

- ・ 行事の企画・運営について、生徒や職員の関わりがどの程度なのか教えてほしい。

(応答：栗野中：南郷 美幸)

- ・ 生徒が様々なことに取り組みたいという気持ちが強い。それを生徒会担当が話し合わせ、校長が確認して、昼休みや放課後に取り組んでいる。

(質問：中種子中：上村 勉)

- ・ 第二土曜日に実施しているボランティア活動には職員はどのように関わっているかを教えてほしい。

(応答：栗野中：南郷 美幸)

- ・ 生徒の声から提案されているため、職員は自発的に11時40分から1時間程度協力している。

(質問：田検中 柳田 照彦)

- ・ ハンセン病の問題など他の問題について、発達段階に応じて実施しているのか教えてほしい。

(応答：栗野中：南郷 美幸)

- ・ 教育課程に位置付け、各内容の指導案まで作成し、それを基にして各学年の実態に応じて実践している。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(E班：松元中：五反田 晴夫)

- ・ リフレーミングで言葉一つ角度を変えて話すことが大事である。ジェンダーの問題など子どもたちが様々な面で生きづらさを感じている。職員の人権感覚を高める取組の実践を紹介してほしい。

(応答：長島中：副田 明彦)

- ・ アンコンシャスバイアスの職員研修を行い、無意識の偏見に気づかせ、指導に生かせる研修ができた。

(D班：河頭中：泷脇 広智)

- ・ 人権教育は、校長として企画の段階からどのような内容で実施するか、生徒に何を感じ取らせるかを考えて進めることが大事である。生徒指導の校則や制服等、社会の人権に対する考え方が変化中、先導を切って取り組んでいかなければならない。

(C班：第一鹿屋中：川原 敏幸)

- ・ 積み上げがなければ人権学習は単発的になるため、感想等を蓄積していくことが大事である。本校では3年生がキャリア教育の一連の流れを系統立てて発表し、代表者が1、2年教室で発表した。普段取り組んでいるものに一工夫することで積み上げができ、自己肯定感の育成につなげることができた。

【指導助言】

県教育庁人権同和教育課主任指導主事

福 雅彰

- ・ 1校目の発表は、小中一貫で共通した目標が設定され、連携した道徳教育の取り組みがなされていた。道徳の授業は、小中で実践事項等を定めて学びの一貫性が上げられると良いのではないかなと思う。
- ・ 2校目の発表は、年間を通した取組が機能していた。スマイリーボックスは、不登校生徒など参加できない生徒に何ができるかを考えていく必要がある。
- ・ 子供の人権について、子供の権利条約に関する教職員の理解も大切だが、当事者になる児童生徒が理解することも大切である子供は権利を持った主体としての存在であることを念頭に置く必要がある。
- ・ 人権が尊重される環境づくりは、学校教育の目指すべき姿である。学校教育の根幹に人権教育を据えて職員の共通理解を図り、効果的实践と適切な評価が行われるようにリーダーシップを発揮して欲しい。

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 12:40~14:00

○ 分科会 I 中学校 第4分科会

「キャリア教育・生徒指導」

○ 研究主題

「生き方の自覚を高めるキャリア教育と生徒指導」

○ 協議題

「目標をもち、自己実現を図るキャリア教育の系統的推進」

○ 発表者 鹿児島市立城西中学校 吉岡 一徳

○ 司会者 鹿児島市立伊敷台中学校 亀山 浩一

○ 記録者 鹿児島市立西陵中学校 山下 信久

【質疑応答】

(①質問: 東桜島中 角 和重 校長)

- ・キャリア教育の重要な一つであるキャリアパスポートの見直しは、どの組織で行っているか。
- ・生徒に書かせる時間帯の設定を教えてください。
- ・書かせるときの留意点は何か。

(①応答: 城西中 吉岡 一徳 校長)

- ・毎週金曜日の2校時に、研修委員会を設定して、常に見直しを行っている。
- ・書かせる時間帯は、年度当初や各行事、学習のまとめ等の節目に書かせている。
- ・卒業生などの見本となるキャリアパスポートを、発達段階に合わせて参考にさせている。

(②質問: 朝日中 山 宗功 校長)

- ・発表中のアンケート結果について、達成度の低い生徒への手立てを教えてください。

(②応答: 城西中 吉岡 一徳 校長)

- ・各教師に、生徒の教育活動をしっかりと見させていないと適切なアドバイスができないので、その点については常日頃から指導している。
- ・小学校段階で自己肯定感は育成されてきていると考えるので、中学校では「自分も出来るかも。」という自己効力感をもたせることが重要と考え、指導している。

(③質問: 第一佐多中 小田 啓介 校長)

- ・発表中のアンケート結果で、達成率が低い生徒たちの共通点を教えてください。

(③応答: 城西中 吉岡 一徳 校長)

- ・自分を認めてもらう場面が少なかった生徒に集中し

ているので、教師には評価する場面を多く設定し、褒めて伸ばすことを大切にするように指導している。

(④質問: 高山中 瀬戸口 浩司 校長)

- ・職場体験学習は、どのように行っているか。

(④応答: 城西中 吉岡 一徳 校長)

・今年度までは、3日間実施してきたが、水曜日に休業の事業所が増えてきており、来年度から2日間に短縮する予定である。その代わりに、キャリア講話など、地域の方々に来てもらい、職業観について学ばせる時間設定を考えている。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(E班: 東桜島中 角 和重 校長)

・ある中学校では、生徒の自主性や主体性を育ませるために、中学2年時の夏休みに、生徒たち自ら職場体験学習を行いたい事業所に出向いて許可をもらい、中学3年時に、自ら開拓したその事業所で体験活動を行わせている学校があった。とても参考になった。

(D班: 錦江中 平國 弘明 校長)

・キャリアパスポートを活用するにあたり系統性を重視させているが、中学1年から中学3年の流れが上手くいかない学校が多いことが共通課題として浮かび上がった。まずは、「自律」をキーワードに、日常生活の基本である「自分で起きて、自分で登校してくる。」という部分から実践させていく必要性を確認し合った。そのためには、保護者の家庭教育の意識も変えさせないといけないと感じた。

(H班: 田皆中 菅野 公平 校長)

・キャリアパスポートの活用が形骸化してきている危機感を感じている学校が多くあった。この場で共通認識ができたので、今後も横の連携を図りながら改善に努めていく確認を行った。

・ある中学校では、校内高校説明会の際、生徒の自己肯定感を高めるために、各高校の先生方を校長室から体育館へ、体育館から校長室への案内・誘導を行わせている。他の中学校でも実践していきたいとの話があった。

・ある中学校では、地域行事でも、可能な限り一人一役を担わせてもらえるように、地域との連携を図っている好事例を聞いたので、参考にしたいと思った。

(記録 鹿児島市立西陵中学校 山下 信久)

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 14:15~15:35

○ 分科会Ⅱ 中学校 第4分科会

「キャリア教育・生徒指導」

○ 研究主題

「生き方の自覚を高めるキャリア教育と生徒指導」

○ 協議題

「豊かな人間性や社会性を育む生徒指導の充実」

○ 発表者 錦江町立田代中学校 土岐 邦寿

○ 司会者 錦江町立錦江中学校 平國 弘明

○ 記録者 南大隅町立第一佐多中学校 小田 敬介

【質疑応答】

(①質問：犬田布中 田之上 直樹 校長)

・i-club との連携は、どのような形でやっているのか。具体的に、学校にどれぐらい訪問し、どのようなサポートをしてもらっているか。

(応答：田代中 土岐 邦寿 校長)

・町が契約を結んでいる。町内の他の学校にも訪問しており、東京から、それぞれ5回程度来校している。企画を立てるときや中間発表のとき、TJK(田代中自己課題追求)の日は1日サポートをもらっている。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(A班：高山中 瀬戸口 浩司 校長)

・錦江町は、町を上げてキャリア教育に取り組んでおり、新聞にもよく掲載されている。

・学校に届く様々な情報から、有益な情報を活用する力を校長として磨いていく必要がある。

・探求活動を進めたいが、準備や時間が必要なことから、職員をどう説得していくかが重要と考える。

・自己肯定感を高める手立てとして、褒めすぎている傾向が見られる。生徒の実態をしっかりと見て、簡単に褒めないことも自己肯定感を高める手立てとなるのではないか。

(F班：和田中 岩城 靖一郎 校長)

・ある中学校では、役場が企画した空き家プログラムに参加している。

・ある中学校では、役場が企画した地方自治について考えるプログラムに参加している。

・様々な依頼を受けて、子供たちのためにどのように役立てていくかを考えるのが校長の役目である。

・大学生の力を借りることを考えている。依頼方法や協力の内容などを具体的に考える必要がある。

【指導助言】

県教育庁義務教育課義務教育係主任指導主事

前山 隆史

(2つの実践校から)

・2つの学校の発表から、主体的に課題解決をする取組が見られ、自己指導能力の育成と他者の主体性を尊重することにつながっている。

・生徒指導のポイントである「生徒の成長・発達を支える生徒指導」「学習指導と生徒指導の一体化」「チーム学校としての生徒指導体制の構築」について、2つの学校の発表から具体的取組を見ることができた。

(国(本県)の現状と課題)

・本県生徒は、自己調整力と学びに向かう人間性が課題である。全国学力・学習状況調査から、自己肯定感とメタ認知力が全国平均を下回っている

・2050年には、100歳以上が53万人に増加。生産年齢人口は3分の2に減少する。人生100年時代の社会人基礎力を育てる必要がある。

・高卒の求人が増えているが、若年の離職率も上昇している。世界と比較して、日本の18歳の社会参画意識は低い傾向が見られる。

・高校生の調査で、社会人として、主体性、創造性、実行力が必要と感じている。

・高校生は進路情報がほしい、生徒を理解してほしい、職業に関する知識をもっと知りたいと思っている。

(キャリア教育の方向性)

・幼児期から高等学校まで、発達段階に応じて系統的にキャリア教育を実施していく必要がある。

・基礎的・汎用的能力を全教科で育む必要がある。

・職場体験を通して、生徒にどのような資質・能力を身に付けさせるのが重要である。そのためには、事前・事後指導の在り方が重要になってくる。

(最後に)

・すべての教育活動の中で、「主体的な活動」と「対話的な活動」を重視することが大切である。

・本年度、『学びの羅針盤』が改定されているので、校内研修等で、ぜひ積極的かつ有効に活用してほしい。

(記録 南大隅町立第一佐多中学校 小田 啓介)

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 12:35~14:00

○ 分科会 I 中学校 第5分科会

「開かれた学校づくり」

○ 研究主題

「家庭や地域の信頼に応える『開かれた学校』づくり

○ 協議題

「地域社会と連携した信頼される学校づくりの推進」

○ 発表者 南さつま立坊津学園 本山 和仁

○ 司会者 南さつま立万世中学校 神田 良文

○ 記録者 南さつま立金峰学園 内村 健二

【質疑応答】

(質問：岳南中 永野 由可里)

・ 以前、地域から協力をいただいていた「読み聞かせ」などは、今も続いているか。

在職中、とても効果的な取組であると思っていた。

(応答：坊津学園 本山 和仁)

・ 今現在も、継続して地域の協力をもらっている。他にも多数、継続している教育活動は多い。

(感想：紫原中 伊口 秀樹)

・ 在職していた6年前と変わらず、今も継続して充実した地域連携が進んでいることをうれしく思う。子供が減少傾向の中、学校が地域との連携を深めていくことで義務教育学校のよさをさらに引き出してほしい。

(質問：加世田中 藤野 義久)

・ 学校運営協議員と生徒、保護者、職員との関わりはどうか。

(応答：坊津学園 本山 和仁)

・ 授業参観などで児童生徒に声かけなどをしていただいているが、直接、児童生徒や職員との語り合いの場を設定してはいない。保護者との会も開いてはいないが、学校運営協議会のメンバーにPTA役員を入れているため、PTAのことについては、協力ができる体制にはなっている。

(質問：宮之城 古里 和彦)

・ 登校班会議の運営はどのように行われているか。また、地域の方が、校舎内に花を生けに来られるとのことであったが、花代はどうしているのか。

(応答：坊津学園 本山 和仁)

・ スクールガードや防犯協会の方と子供、職員と一緒に安全指導を行っている。花については、ボランティアで活動していただいている。庭で育てているものや野に咲く花等を持ってきていただき、生けてもらっている。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(G班：加世田中 藤野 義久)

・ 学校運営協議員と生徒、職員との関わりについて、全校朝会等で話をしてもらっている。

学校運営協議会は、委員の選定が重要である。学校の応援者であるという立場を理解した委員で構成されることが望ましい。

(H班：川内南中 松本 眞一)

・ 学校運営協議会との連携については、校務分掌にしっかりと位置付け、取組の内容を周知することが大切である。

生徒会の取組について、学校運営協議会の中で子供に発表させたことは効果的であった。

(応答：坊津学園 本山 和仁)

・ 学校運営協議会が校長の学校経営方針に賛同し、「一緒に学校を創造していこう。」といった同じ方向性で取り組む姿勢が求められる。やはり、「人」が大事であると考え。また、現在はPTA会員ではない方々を会員として呼び込むことも一定の効果が上がっている。地域からは、職員の地域行事への参加等をはじめ、学校への要望等も多いが、校長がじっくりと考え、一つ一つにフィルターをかけ、内容としてどうか、時間はどうか、職員の負担にはならないかなど判断する必要がある。

これまで児童生徒も多くの活動に充実感を味わい、感謝している。また、その子供たちの活動する姿が家庭や地域の信頼へとつながっていく。これからも、学校、家庭、地域など一体となって子供たちを育てることを継続していきたい。また、今日、ご意見いただいたことを参考に、家庭や地域の信頼に応える『開かれた学校』づくりを推進していきたい。

(記録 金峰学園 内村 健二)

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 14:15~15:35

○ 分科会Ⅱ 中学校 第5分科会

「開かれた学校づくり」

○ 研究主題

「家庭や地域の信頼に応える『開かれた学校』づくり」

○ 協議題

「教育課程の自己点検・自己評価等と学校関係者評価(外部評価)の充実」

○ 発表者 薩摩川内市立祁答院中学校 末留健太郎

○ 司会者 薩摩川内市立川内南中学校 松本 眞一

○ 記録者 薩摩川内市立 入来中学校 石畑 浩一

○ 分科会当日の発表について

大会要録の117ページに示されたA校区の実践の中から、特に祁答院中学校での取組を中心に発表しました。特に地域の信頼に応えるため、学校運営協議会から発せられた通学路の危険箇所改善について陳情書を作成して上申し、危険箇所解消につなげた。この実績から学校運営協議会との信頼関係を深めることができました。さらに祁答院中でR5からの防災教育研究の成果であるワークショップの手法で安全マップを新たに作り出す作業を進め、経過を学校運営協議会便りに掲載し地域に広報することで、職員や生徒と学校運営協議会の連携例を示せた。

【質疑応答】

(質問：輝北中 堀内 隆史)

・学校運営協議会委員のアンケートからも、地域が廃れてしまう危機感が感じられた。そのような地域の思いや要望をしっかりと受け止めようとされた校長の姿勢が素晴らしかった。真似していきたい。

(応答：祁答院中 末留健太郎)

・校区小学校の合併のタイミングをよいきっかけにして動くことができた。堀内教頭のがんばりに助けられた。

(質問：紫原中 伊口 秀樹)

・学校運営協議会は校長から独立していたり、リーダーシップを取れているか？

(応答：祁答院中 末留健太郎)

・コロナ前は自分で動く感じがあったらしい。現在は学校への協力態勢はある。今後、触れ合う時間を作り、交流性を高めたい。

(応答：川内南中 松本 眞一)

・坊津学園のように系統的・組織的でない。学校運営協議会と学校の関係はウインウインでなく、学校が地域貢献で生徒を出して、地域だけがウインの状態だ。

(質問：加世田中 藤野 義久)

・協議会便りは誰が、年に何回出しているのか？

(応答：祁答院中 末留健太郎)

・事務局校長が、年5回。小学校再編便りから移行。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(A班：郡山中 岩元 邦俊)

・学校関係者評価が無難な回答になりがちで積極改善につながらない。記名制にするかどうか等、事前検討が必要だ。

(B班：大崎中 吉留 雅樹)

・評価項目の質問文、尋ね方に留意が必要。CSの会の夜間開催ばかりではよくないので、昼開催を検討中。大崎中ではCS出前講座が年1回あり、300人ちょっとの生徒が20講座に分かれて体験させてもらう、ありがたい行事がある。他に生徒会とCSのランチミーティングもある。関連で、鹿児島市の中学校の実例でPTA参加率が保護者20%、教職員50%の所があるとのこと心配だ。

(C班：紫原中 伊口 秀樹)

・学校運営協議会の委員の中には、学校教育をあまり知らない方もいらっしゃるの、評価をしてもらう前に学校をより多く見てもらう必要がある。紫原中では委員に県民週間に授業参観案内をしたが、10名中2名の参加にとどまった。

(D班：黒神中 野村 浩二)

・発表の中に、C校の実践として学校運営協議会にて主任格の職員に自分の担当分野についての報告をさせた取組が紹介されていたが、職員の意識改革につながるとてもよい例だと思った。本校でも参考にしたい。

(E班：星峯中 益満 裕美)

・学校運営協議会の委員の人選も大事だという話が出た。評価項目を精選して敢えて項目を少なめにするこ

とも必要かもしれない。また、評価項目1つ1つに設定している理由を付けるのもよい。

(F班：生冠中 柿元 真一)

・本校の取組として、学校運営協議会の委員5名を入学式で紹介したり、3年生の面接指導で面接官役を担当してもらったりしている。会長には体育大会・文化祭で全体に講評をしてもらっている。年5回の会以外にもどんどん学校の中に入ってもらう形をとって、委員に生徒たちを直接知ってもらうよき機会としている。

#### 【指導助言】

県教育庁教職員課小中学校人事管理係主幹

毛利 真吾

校長先生方が各校の課題に対して、一生懸命取り組む姿が見えて私個人が刺激もらった。

・ 国の第4期教育振興計画がR5.6月に示され、それをもとに県でも教育振興計画の検討・策定が行われ、R6年からスタートしている。(既に校長先生方においては、地域の実態・課題を踏まえた上で本計画の内容をGDや経営方針に反映された方もいらっしゃると思う。)

大きなコンセプトの1つが、ウェルビーイングの向上であり、「誰もが豊かさ・幸せを感じられる地域」を創造していくことが求められている。この大コンセプトに関連し、学校運営協議会(CS)や外部評価を通して、学校が地域や家庭と一体となった活動を展開すべきことを国では5つの基本方針の1つとして、県では開かれた学校づくりの中で、地域ぐるみの安心・安全な環境づくり例として示されている。いずれにしても、学校運営協議会(CS)については、その制度化の推進が今後も続いていくのは間違いのない流れである。

現状としては、小中・義務教育学校でのCS導入率はR6.5.1現在で本県63.8%。全国65.3%であり、国としては県立学校にも広げていきたい意向とのことである。

・ 本日の発表1校目、坊津学園はCS導入して長くなってきての課題が見えてきた例であった。

12年目として何らかの課題が生じてくるのが必然なのだが、校長先生のCSへの思い「郷土を愛する子の

育成」がしっかり外に発信されていて、それに地域が反応しているように感じた。郷土連携ができていて、組織が詳細に作り上げられ、確立していて、目的が明確でしかも持続性があるという理想的な状態が維持されている。課題があるとしたら、学校の小規模化でP戸数減少により、地域と学校の間をつなぐ役目をしてきたPTA活動の活性化くらいか?つまり、PTA会員でない人を学校に入れる取組でもあるCS活動は今後も期待大である。学校職員側の問題としては引継ぎの難しさが挙げられるが、坊津学園ではそれもクリアし、校長先生が地域の要望の中から「無理のない、持続性のあるもの」を選別しているとのこと、先見の明が生きていて素晴らしい。

・ 2校目の発表、祁答院中はまだCS導入してそこまで長くはないところでの課題が見られた例である。外部評価に着目していたが、この作成において最も熟議すべきは学校・地域が目標やビジョンをどれだけ共有できるかにある。A校では陳情書、B校ではCSへの職員の積極参加推奨、C校ではCSが評価しやすい評価項目への見直し、それぞれに校長先生が地域の実態を見つつ課題にしっかり取り組んでいることが伝わる具体例であった。地域と共通目標を持った、真の連携が取れている証拠とも言える。

(記録 入来中 石畑 浩一)